

## 教育学研究科教員業績一覧

(2012年4月1日から2013年3月31日)

### 基礎教育学コース

金森 修 (教授)

#### 〈単著〉

- 1) 『動物に魂はあるのか』 単著  
中央公論新社, 中公新書, 2012年8月25日, pp.1-262.

#### 〈編著〉

- 1) 『合理性の考古学』 編著  
東京大学出版会, 2012年12月6日, pp.1-525 + 1-5, 1-17, i-iv.  
2) 『エピステモロジー —— 20世紀のフランス科学思想史』 編著  
慶應義塾大学出版会, 2013年1月30日, pp.1-490 + 1-16.  
3) 『生命倫理のフロンティア』 共編著: 粟屋剛・金森修  
丸善出版, 2013年1月31日, pp.1-212, i-xiii.

#### 〈分担執筆〉

- 1) 「システムの信用失墜と機能不全」  
藤原書店編集部編『3・11と私』2012年8月30日, pp.320-323.  
2) 「〈動物靈魂論〉の境位 —— 或る言説空間の衰退と消滅」  
金森修編『合理性の考古学』, 東京大学出版会, 第二章, 2012年12月6日, pp.93-176.  
3) 「愛するゴーレム」  
大場昌子・佐川和茂・坂野明子・伊達雅彦編『ゴーレムの表象』, 南雲堂, 2013年1月25日, pp.83-115.  
4) 「序論 〈客観性の政治学〉」, 「解題」  
金森修編『エピステモロジー —— 二〇世紀のフランス科学思想史』, 慶應義塾大学出版会, 2013年1月30日, pp.5-34, pp. 481-490.  
5) 「虚構に照射される生命倫理」  
粟屋剛・金森修編『生命倫理のフロンティア』, 丸善出版, 2013年1月31日, pp.1-20.  
6) 「失われた輝きを求めて安部公房『他人の顔』」, 「しびれるような読後感にため息ヘンリー・ミラー『南回帰線』」  
東京大学新聞社編『東大教師青春の一冊』 信山社新書, 2013年3月18日, pp.171-174, pp.195-198.

### 〈論文〉

- 1) 「合成生物の〈生政治学〉」  
『思想』 岩波書店, no.1066, 2013年2月5日, pp.283-302.  
2) 「医療倫理の〈事務化〉に抗して」  
日本蘇生学会編『蘇生』 第32巻第1号, 2013年3月28日, pp.1-6.

### 〈翻訳〉

- 1) Introduction, pp.391-398 et Traduction d'un texte de Omori Shozo, "Le passe et le reve en tantque fabrication langagiere", pp.398-421, Dalissier, M., S.Nagai et Y.Sugimura, sous la direction de, Philosophie Japonaise, Paris, J. Vrin, 2013.  
日本思想史の論集における大森荘蔵のテキストの翻訳と, 大森哲学の簡単な紹介

### 〈参考論文・エッセイ〉

- 1) 「〈疎外〉としての心——吉本隆明追悼」  
『図書新聞』 第3058号, 2012年4月14日  
2) 「科学見直し, 文化の視点で」  
『日本経済新聞』 2012年4月14日, 談話  
3) 「ツァラトウストラ」  
東京大学出版会『UP』 編集部編『東大教師が新入生にすすめる本』, 東京大学出版会, 2012年4月25日, p.30.  
4) 「システムの信用失墜と機能不全」  
『環』 Vol.49, 2012 Spring (特集: 3.11と私), 藤原書店, 2012年4月30日, pp.93-94.  
5) 「ベルモント・レポート」, 「葉害の定義と歴史」  
盛永審一郎・松島哲久編『医学生のための生命倫理』 丸善出版, 2012年9月30日, pp.70-71, 126-127.  
6) 「iPSの“次の壁”」(米本昇平との対談)  
『公研』 No.591, 2012年11月号, 2012年11月8日, pp.36-46.  
7) 「異常/正常」, 「科学知の社会学」, 「バイオサイエンス/バイオテクノロジー」, 「バシユラル」,  
「村上陽一郎」  
大澤真幸・吉見俊哉・鷺田清一編『現代社会学事典』 弘文堂, 2012年12月15日, p.48, pp.168-169, pp.1014-1015, p.1026, pp.1239-1240.  
8) 「対談: 〈人間の尊厳〉は悪魔の概念か」 小松美彦との対談

『週刊読書人』第2972号, 2013年1月11日

9) 「〈人間圏〉の周辺で人間を考える」

『聖教新聞』2013年3月12日

#### 〈学会発表・講演〉

1) 「専門知と教養知の境域」

第22回教育思想史学会, 東京大学本郷キャンパス,  
2012年10月14日

2) 「誰のための生命倫理なのか」

『日本蘇生学会』第31回, 講演, ピアザ淡海, 2012  
年11月23日

3) 「原発事故と科学思想史」

第61回湘南科学史懇話会, 藤沢市労働会館, 2013年  
1月19日

#### 〈書評〉

1) 「個別の技術的伝統にみる文化史」

『日本経済新聞』2012年4月22日

2) 「近代における〈警戒的人間観〉の発露」

『週刊読書人』第2938号, 2012年5月11日

3) 「陸海軍と科学者の関係浮き彫りに」

『日本経済新聞』2012年6月24日

4) 「2012年上半年読書アンケート」

『図書新聞』第3071号, 2012年7月21日

5) 「2012年上半年三冊」

『週刊読書人』第2949号, 2012年7月27日

6) 「ベルクソンを介して, フロイトに沈潜する」

『週刊読書人』第2953号, 2012年8月24日

7) 「技術の進展を軸に未来を予想」

『日本経済新聞』2012年11月11日

8) 「〈科学批判〉の命脈の再評価のために」

『図書新聞』第3088号, 2012年12月1日

9) 「2012年下半年読書アンケート」

『図書新聞』第3091号, 2012年12月22日

10) 「2012年読書アンケート」

『みすず』第611号, 2013年2月1日, pp.6-8

11) 「情報概念の歴史と現代の状況」

『日本経済新聞』, 2013年3月10日

### 川本隆史(教授)

#### 〈論文〉

川本隆史(単著), 「正義とケアへの教育——たえず  
ロールズとノディングズを顧みつつ」, 『法と  
教育』第2巻第1号, 法と教育学会, 2012年,  
pp.103-112.

#### 〈その他の業績〉

川本隆史(招待講演), 「〈社会〉を学び, 学びほぐ

す——「高校紛争」から公民科教科書執筆へ」,  
第43回広島県私立学校教育研修会・社会科部会,  
2012年8月20日(広島女学院高等学校).

川本隆史(セッション提題), 『戦後日本の思想』  
(1959年)の教訓, 社会思想史学会第37回大会社  
会思想史学会第37回大会, 2012年10月27日(一橋  
大学).

川本隆史(項目執筆), 「正義論」ほか9項目, 大澤  
真幸ほか編集『現代社会学事典』, 弘文堂, 2012  
年, 1590ページ.

川本隆史(文責), 「はしがき——「非常時」の出来  
事と倫理学」, 日本倫理学会編『倫理学年報』,  
2013年, pp.5-10.

### 小玉重夫(教授)

#### 〈著書〉

小玉重夫「政治—逆コース史観のアンラーニング」  
森田尚人・森田伸子編『教育思想史で読む現代教  
育』勁草書房, 2013年3月25日, pp.37-55

#### 〈論文〉

小玉重夫「シティズンシップ教育再入門—市民教育  
に求められる教師の指導性」『高校生活指導』194  
号, 2012年8月, 教育実務センター, pp.54-63

小玉重夫「市民科学と放射線教育」『科学』82巻10号,  
2012年10月, 岩波書店, pp.1142-1145

小玉重夫「マルクスを教育研究に再導入する」『近  
代教育フォーラム』21号, 2012年10月, 教育思想  
史学会, pp.15-22

小玉重夫「シティズンシップ教育と政治的リテラ  
シー」『教育研究』67巻12号, 2012年12月, 筑波  
大学附属小学校初等教育研究会, pp.14-17

小玉重夫「ハンナ・アレントとベーシックインカム  
—脱冷戦的思考の方へ—」『理想』No.690, 2013  
年3月5日, 理想社, pp.50-61

#### 〈翻訳〉

苅谷剛彦・志水宏吉・小玉重夫共編訳, ヒュー・ロー  
ダー, ジョアンヌ・ディラポー, A.H.ハルゼー,  
フィリップ・ブラウン(編集)『グローバル化・  
社会変動と教育2:文化と不平等の教育社会学』  
東京大学出版会, 2012年5月(編集と7章「民主  
主義, 教育, そして多文化主義」(C・A・トー  
レス)の翻訳, 編訳者解説を担当)。

**田中智志(教授)****〈著書〉**

田中智志(共著),『教育人間学——臨床と超越』(田中毎実編),第1章「共存在の主体——デリダの「生き残り」と正義」を執筆,東京大学出版会,2012.8,総頁数256.

田中智志(単著),『教育臨床学——〈生きる〉を学ぶ』,高陵社書店,2012.11,総頁数276.

田中智志(共著),『教育思想史で読む現代教育』(森田尚人・森田伸子編),第13章「倫理的基礎——教育を支える愛」を執筆,勁草書房,2013.3,総頁数401.

**〈雑誌論文〉**

田中智志(単著),「図書紹介——石戸教嗣・今井重孝編『システムとしての教育を探る——自己創出する人間と社会』」,『教育哲学研究』,第105号,pp.201-202,2012.5.

田中智志・生田久美子(共著),「教育の共同性とは何か——近しさの基層」,『近代教育フォーラム』(教育思想史学会編),第21号,pp.149-159,2012.10.

田中智志(共同シンポジウム報告),「『学び』を改めて問う——主体的な学びとは何なのか」『発表論文集』,pp.14-5, pp.26-7,渡部信一,美馬のゆり,藤田英典,松坂浩史(報告),松下佳代(司会),第19回大学教育フォーラム,京都大学吉田キャンパス,2013.3.

**比較教育社会学コース****恒吉僚子(教授)****〈分担執筆〉**

Ryoko Tsuneyoshi. "Communicative English in Japan and 'Native Speakers of English'," in *Native-Speakerism in Japan: Intergroup Dynamics in Foreign Language Education*, edited by Stephanie Houghton and Damian Rivers. Clevedon: Multilingual Matters, 2013, pp.119-131.

Ryoko Tsuneyoshi. "Junior High School Entrance Examinations in Metropolitan Tokyo: The Advantages and Costs of Privilege," in *Japanese Education in an Era of Globalization: Culture, Politics, and Equity*, edited by Gary DeCoker and Christopher Bjork. New York: Teachers College Press, 2013, pp.164-182.

**〈報告書・その他〉**

恒吉僚子「日本社会における東アジア『留学生』の

位置についての考察」『「東アジアの教育—その歴史と現在」最終報告書(日本教育学会特別課題研究),日本教育学会特別課題研究委員会,2012,8月:19-37.

恒吉僚子「多文化教育」「留学」「帰国子女」『現代社会学事典』弘文堂,2012年.

恒吉僚子「異文化理解教育」『社会調査事典』丸善出版,2012年.

恒吉僚子「スタンダードベースの学校改革」「総合学校改革」「アイデンティティ」「マイノリティ教育」「質的調査」『比較教育学事典』日本教育学会,東信堂,2012年.

恒吉僚子「国際的に見た日本の学校行事の意義」『道徳と特別活動』(特集 学校行事)Vol.2,文溪堂,2012年,4-7.

恒吉僚子「特別活動が今後重視すべきこと」(日本型の教育としての特別活動,座談会)『初等教育資料』4月号,2012年, No.898: 60-65.

**中村高康(教授)****〈著書〉**

中村高康(編著)『よくわかる教育社会学』(酒井朗,多賀太氏との共編),ミネルヴァ書房,2012,総頁数200.

中村高康(共著)『学歴・競争・人生—10代のいま知っておくべきこと』(吉川徹氏との共著),日本図書センター,2012,総頁数237.

**〈雑誌論文〉**

中村高康(単著),「大学入学者選抜制度改革と社会の変容—不安の時代における「転機到来」説・再考—」日本教育学会編『教育学研究』第79巻第2号,2012, pp.194-204.

中村高康(単著),「テーマ別研究動向(教育)—教育社会学的平衡感覚の現在—」日本社会学会編『社会学評論』第63巻3号,2012, pp.439-451.

Nakamura, Takayasu (単著), "Sociologization, Pedagogization, and Resociologization: Has the post-war Japanese sociology of education suffered from the Galapagos syndrome?" *International Journal of Japanese Sociology*, Vol.22, Issue1, 2013, pp.64-79.

**〈その他〉**

中村高康(訳),「ブラウン&ローダー『グローバル化・知識・マグネット経済の神話』」広田照幸・吉田文・本田由紀編訳『グローバル化・社会変動と教育1 市場と労働の教育社会学』東京大学出

版会, 2012, pp.153-177.

中村高康 (単著), 「Book Review 佐々木隆生著『大学入試の終焉—高大接続テストによる再生—』 IDE大学協会『IDE現代の高等教育』No.545, 2012, pp.74-75.

中村高康 (単著), 「アスピレーション」「教育機会」「知能」「試験」「メリトクラシー」大澤真幸・吉見俊哉・鷲田清一編『現代社会学事典』有斐閣, 2012.

中村高康 (単著), 「受験生獲得ではなく教育的な観点で制度設計を」朝日新聞出版『2014年版 大学ランキング』2013, pp.62-63.

## 橋本 鉦市 (教授)

### 〈著書〉

橋本鉦市 (翻訳) 「ラジャニ・ネイドゥ／イアン・ジャミーソン『学生のエンパワメントか学習の崩壊か?—高等教育における学生消費者主義のインパクトに関する研究課題—』」広田照幸・吉田文・本田由紀監訳『グローバル化と社会変容の中の教育』東京大学出版会, 2012年4月, 221-238頁。

### 〈雑誌論文〉

橋本鉦市「専門職養成と高等教育—量と質をめぐる政策課題—」『社会福祉研究』第115号, 2012年10月, 65-72頁。

橋本鉦市・齋藤崇徳・加藤靖子・千田恭平「研究者市場における文科系博士院生の就職要件—JREC-INによる公募情報の分析—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第52巻, 2013年3月, 61-86頁。

橋本鉦市「戦後日本における高等教育関連議員の構造分析」『大学論集』第44集, 2013年3月, 163-178頁。

橋本鉦市「戦後日本の高等教育関連議員と政策課題—国会における発言量と内容分析—」『名古屋高等教育研究』第13号, 2013年3月, 235-256頁。

### 〈報告書・辞典類など〉

橋本鉦市編「文科系大学院博士課程の教育プログラムの革新と新たな人材養成モデルの構築に関する総合的研究」(公益財団法人カシオ科学振興財団 第29回(平成23年度)研究助成最終成果報告書), 2013年3月, 全101頁。

橋本鉦市「医学教育(医師養成)」日本産業教育学会編『産業・職業教育学ハンドブック』大学教育出版, 2012年12月, 84-85頁。

橋本鉦市「高等教育」弘文堂『現代社会学事典』,

2012年11月, 413-414頁。

### 〈学会報告など〉

橋本鉦市「戦後日本における高等教育界の政治アクター」『日本高等教育学会』第15回大会, 2012年6月2日, 東京大学。

矢野眞和・濱中義隆・足立寛・橋本鉦市・丸山和昭「高等教育学会会員調査(15周年記念事業)—分析結果報告—」『日本高等教育学会』, 第15回大会, 2012年6月3日, 東京大学。

橋本鉦市「わが国の専門職養成をめぐる動向と課題」名古屋大学高等教育研究センター『第64回客員教授セミナー』2013年1月8日, 名古屋大学。

丸山和昭・白旗希実子・橋本鉦市「『次世代専門職』のアクレディテーションと能力基準—米国のカイロプラクティック, 家族療法, 葬儀サービスを事例として—」『東北教育学会』第70回大会, 2013年3月9日, 仙台白百合大学。

橋本鉦市「日本の専門職の構造について」日本図書館情報学会シンポジウム『日本の専門職からみた図書館専門職養成の検討』2013年3月16日, 東京大学。

## 本田 由紀 (教授)

### 〈著書〉

本田由紀 (共編訳), 『グローバル化・社会変動と教育 1 市場と労働の教育社会学』(広田照幸・吉田文と共編訳), 東京大学出版会, 2012, 総頁数354頁。

本田由紀 (単著), 「痛いけど体の芯に届く言葉『東京漂流』, 『ほかの誰も薦めなかったとしても今のうちに読んでおくべきだ』と思う本を紹介します。」河出書房新社, 2012, pp.183-188.

本田由紀 (単著), 「現実の解決策は, 面倒な作業の後にしか見つからない」, 木村俊介『「調べる」論—しつこさで壁を破った20人』NHK出版新書, 2012, pp.61-70.

本田由紀 (単著), 「解説」, 鈴木翔『教室内(スクール)カースト』光文社新書, 2012, pp.294-308.

### 〈雑誌論文〉

本田由紀 (共著), 「日本の教育社会学の方法・教育・アイデンティティ: 制度的分析の試み」(齋藤崇徳・堤孝晃・加藤真との共著), 『東京大学大学院教育学研究科紀要』第52巻, 2013, pp.87-116.

### 〈その他〉

本田由紀 (講演記録), 「社会構造の変容と若者の現

状), 『ビジネス・レーパー・トレンド』2012年9月号, pp.3-10.

本田由紀 (学会発表), 「教育社会学(教育)の質保証は可能か」, 『日本教育社会学大会発表要旨集録』第64集, 2012, pp.397-398.

本田由紀 (インタビュー), 「若者の雇用: 「太陽」型の政策を: 東京大学大学院教授 本田由紀さんに聞く」, 『女性のひろば』400号, 2012, pp.30-33.

本田由紀 (発表記録), 「話題提供3 職業的意義の観点から」, 『2012年度学校教育高度化センター主催シンポジウム 社会に生きる学力形成をめざしたカリキュラム・イノベーション: 具体的な実践の提案』年報2012, 2013, pp.30-39

#### 生涯学習基盤経営コース

影 浦 峽 (教授)

##### 〈著書〉

Kyo Kageura (単 著), *The Quantitative Analysis of the Dynamics and Structure of Terminologies*. Amsterdam: John Benjamins. 2012, 243pp.

##### 〈雑誌論文〉

Kyo Kageura and Ryo Murayama, "Web-based archiving of parallel and comparable documents," *Studies in Lifelong Learning Infrastructure Management*. 37, 2013, pp.47-56.

##### 〈国際会議〉

Kyo Kageura and Ryo Murayama, "QRpac: user-driven archiving of parallel and comparable documents from the web," *ICADL 2012: The 14th International Conference on Asia-Pacific Digital Libraries*. 12-15 November 2012.

Bogdan Babych, Tony Hartley, Kyo Kageura, Martin Thomas, Masao Utiyama, "MNH-TT: a collaborative platform for translator training," *Translating and the Computer*. 29-30 November 2012.

Anthony Hartley, Midori Tatsumi, Hitoshi Isahara, Kyo Kageura and Rei Miyata, "Readability and translatability judgments for 'controlled Japanese'," 16th Annual Conference of the European Association for Machine Translation. 28-30 May 2012.

Midori Tatsumi, Anthony Hartley, Hitoshi Isahara, Kyo Kageura and Katsumasa Shimizu, "Building translation awareness in occasional authors: a user case from Japan," 16th Annual Conference of the

European Association for Machine Translation. 28-30 May 2012.

Bogdan Babych, Tony Hartley, Kyo Kageura, Martin Thomas and Masao Utiyama, "Scaffolding, capturing, preserving interactions in collaborative translation," 2012 LTTTC International Conference: The Making of a Translator. 28-29 April 2012.

##### 〈国内学会〉

宮田玲, 立見みどり, Anthony Hartley, 影浦峽, 井佐原均, 「日英機械翻訳の精度改善と原文の読みやすさ向上のための日本語書き換えルールの作成と評価: 地方自治体ウェブサイト文書を対象に」言語処理学会第19回年次大会, 2013, pp. 710-713.

##### 〈社会活動〉

影浦峽「専門知識と事故の状況」『原発災害とアカデミズム』東京: 合同出版, 2012, pp. 140-159.

根 本 彰 (教授)

##### 〈著書〉

根本彰「図書館」『現代社会学事典』弘文堂, 2012, p.954-955.

根本彰「無文字社会の歴史」東京大学新聞社編『東大教師 青春の一冊』信山社 2013. p.90-92.

##### 〈雑誌論文〉

根本彰「長尾館長時代の国立国会図書館を振り返る」『図書館雑誌』Vol.106, No.7, 2012. p.470-472.

根本彰「資格社会における司書の専門性評価の方法について」『図書館雑誌』vol.106, no.10, 2012年10月, p.714-716.

根本彰「フランスの学校教育における資料情報支援体制」『学習情報研究』230号, 2013年1月号, p.52-55.

根本彰・松本直樹・青柳英治「日本の専門職養成構造における司書の位置づけー「管理栄養士」「臨床心理士」との比較においてー」『生涯学習基盤経営研究』第37号, 2012年度, p.57-71.

根本彰「2012年読書アンケート」『みすず』No.611, 2013, p.34.

根本彰「東大教師が新入生にすすめる本」『UP』No.486, 2013年4月号, p.14-15.

##### 〈口頭発表〉

パネルディスカッション「芸亭院から1250年 図書館のこれまでとこれから」2012年5月10日 日本図書館協会・近畿公共図書館協議会(コーディネータ)

根本彰・青柳英治・松本直樹「図書館専門職養成の質向上のための予備的考察：「臨床心理士」「管理栄養士」の事例をもとにして」日本図書館情報学会春季研究集会 2012年5月12日（三重大学）

根本彰「21世紀に図書館は生き残るのか」財務省ランチミーティング 財務省本館 2012年8月1日

根本彰「『理想の図書館』を考える」信州しおじり本の寺子屋 塩尻市立図書館 2012年9月24日

安藤友張・高鷲忠美・根本彰・今井福司「戦後初期の日本における学校図書館法諸案：全国学校図書館協議会の「学校図書館法案要綱」（昭和27年12月）の検討を中心に」日本図書館情報学会研究大会 2012年11月18日（九州大学）

根本彰「21世紀のカリキュラム展開と学校図書館職員養成」日本の学校図書館専門職員はどうあるべきか：論点整理と展望 LIPER3公開研究会（東京大学教育学部156教室）2012年12月1日

『子どもの読書活動を考える国際シンポジウム～子どもたちの本読み事情：アジア各国の今とこれから～』平成25年1月13日（日）伊藤国際学術研究センター伊藤謝恩ホール（東京大学本郷キャンパス）（総合司会）

根本彰「情報拠点としての図書館へ」平成24年度図書館地区別研修（九州・沖縄地区）沖縄県立図書館 2013年1月22日

根本彰「地域・学校ワーキンググループ報告」「外国調査ワーキンググループ報告（フランス）」『子どもの読書活動と人材育成に関する調査研究』成果報告会 2013年2月23日 東京大学本郷キャンパス福武ホール

「日本図書館情報学会シンポジウム 日本の専門職養成の構造からみた図書館専門職養成の検討」2013年3月16日 東京大学赤門総合研究棟 司会

#### 〈その他〉

『小布施町・長野市の生涯学習基盤—図書館、博物館まちづくり』2012年度「生涯学習基盤調査実習」報告書 東京大学教育学部教育実践・政策学コース 2013年2月（新藤浩伸と共編）

根本彰「貸し出し数過去最高 これからの図書館は」NHKラジオ第1夕方特集私も一言！2012年10月31日 午後5時～6時出演

牧野 篤（教授）

#### 〈著書〉

「人が生きる社会と生涯学習—弱くある私たちが

結びつくこと」, 大学教育出版, 2012年4月, pp.301

#### 〈報告書（編集）〉

「自治を支えるダイナミズムと公民館—飯田市公民館分館活動を事例として—」, 東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室『学習基盤社会研究・調査モノグラフ4』（荻野亮吾・中村由香と共編）2012年7月

#### 〈論文（日本語・単著）〉

「少子高齢社会と生涯学習・社会教育—動的プロセスとしての社会へ—」, 岐阜大学『平成24年度社会教育主事講習テキスト』, pp.193-214 2012年7月

「他者への想像力に定礎された〈社会〉をつくるために」, 東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室『学習基盤社会研究・調査モノグラフ4』 pp.1-6（「序章」部分）2012年7月

「公民館分館活動と地域社会のダイナミズム」, 東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室『学習基盤社会研究・調査モノグラフ4』, pp.84-98（「終章」部分）2012年7月

「飯田市公民館分館をとらえる視座について」, 東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室『学習基盤社会研究・調査モノグラフ4』, pp.99-104（「附論」部分）2012年7月

「社会の構成プロセスとしての個人と「学び」」, 文部科学省生涯学習政策局『生涯学習政策研究—生涯学習をとらえなおす：ソーシャル・キャピタルの視点から』, pp.30-39 2012年10月

「酒田短期大学, 閉校す（二〇〇二年）—日中留学生交流秘史」, 園田茂人編『日中関係史 1972-2012 III 社会・文化』, 東京大学出版会, pp.231-268（第七章）（『日中関係史 1972-2012』全3巻のうち第3巻）2012年9月

「彼氏彼女の留学事情—インタビューに見る中国の若者の日本留学—」, 日本教育学会特別課題研究委員会「東アジアの教育—その歴史と現在—」研究会『「東アジアの教育—その歴史と現在—」最終報告書』, pp.38-69 2012年8月

#### 〈論文（日本語・共著）〉

「生涯学習と社会を記述する視点—飯田市公民館調査を題材に—」, 『東京大学大学院教育学研究科紀要』第52巻, pp.203-232（新藤浩伸・古壕典洋と共著, 担当部分「はじめに」 pp.203-205, 「III 動的プロセスとしての〈学び〉へ—」, pp.217-229, 2013

年3月

〈論文（中国語・単著）〉

「中国教育発展の未来在都市“社区”里」, 上海市楊浦區學習型社會建設與終身教育促進委員會辦公室『城区終身教育與學習共同体建設國際研討會論文集』, pp.96-113 2012年10月

〈論文（英語・単著）〉

Changing grassroots communities and lifelong learning in Japan, *Comparative Education*, vol.49, no.1, pp.42-56 2013年1月

Liquidation of Labour Markets and Adult Education in China, David N. Aspin, Judith Chapman, Karen Evans and Richard Bagnall ed., *Second International Handbook of Lifelong Learning*, Springer, pp.287-304(Part 1) 2012年

Quiet Dynamism of Local Communities: Restructuring of Grassroots Municipalities and Lifelong Learning in Japan, PIE / PASCAL International Exchanges “Themes” *Special Country Paper* (<http://pie.pascalobservatory.org/pascalnow/blogentry/special-country-papers/iidanagano-stimulus-paper>), uploaded at June 14, 2012 2012年6月（6月14日確認）

〈その他〉

「はじめに：人とつながる社会のために」, 東京大学教育学部社会教育学研究室『人の元気でいきるまち—うみだす・ささえる・つなげる・はぐくむ—（東京大学教育学部社会教育学演習2012年度飯田市社会教育調査実習報告）』, pp.i-iv 2013年3月

「新たな生き方が農村に 人々が多重な価値を生み出す」, 『農業共済新聞』p.3 2013年1月1日付

「東アジア近代の社会教育」, 社会教育・生涯学習辞典編集委員会編『社会教育・生涯学習辞典』, 朝倉書店, pp.507-508 2012年11月

「二本足で歩く」制度」, 社会教育・生涯学習辞典編集委員会編『社会教育・生涯学習辞典』, 朝倉書店, p.464 2012年11月

「陶行知」, 社会教育・生涯学習辞典編集委員会編『社会教育・生涯学習辞典』, 朝倉書店, p.437 2012年11月

「中国の文化施設・社会教育施設」, 社会教育・生涯学習辞典編集委員会編『社会教育・生涯学習辞典』, 朝倉書店, pp.417-418 2012年11月

「中国の成人教育・生涯学習」, 社会教育・生涯学習辞典編集委員会編『社会教育・生涯学習辞典』, 朝倉書店, pp.416-417（上田孝典と共著）2012年

11月

「中華人民共和国教育法」, 社会教育・生涯学習辞典編集委員会編『社会教育・生涯学習辞典』, 朝倉書店, pp.415-416 2012年11月

「社区教育」, 社会教育・生涯学習辞典編集委員会編『社会教育・生涯学習辞典』, 朝倉書店, p.266 2012年11月

「蔡元培」, 社会教育・生涯学習辞典編集委員会編『社会教育・生涯学習辞典』, 朝倉書店, p.191 2012年11月

「報告Ⅲ 大学研究室のかかわる地域プロジェクトを通して—実習・学習・実践—」, 『日本社会教育学会紀要』No.48, pp.99-101 2012年8月

「報告Ⅱ ESDと人の自己認識をめぐる社会教育の課題」, 『日本社会教育学会紀要』No.48, pp.33-35 2012年8月

「特別座談会・超高齢社会だからこそ元気に「1町会1公民館の町づくりを全国モデルに」」, 『月刊北國 アクトス』, No.278（2012年9月号）, pp.88-90 2012年8月

「毛沢東」, 日本比較教育学会『比較教育学事典』, 東信堂, p.376 2012年6月

「陶行知」, 日本比較教育学会『比較教育学事典』, 東信堂, p.285 2012年6月

「社区教育」, 日本比較教育学会『比較教育学事典』, 東信堂, p.201 2012年6月

「「むら」は「つながり」で生き返る」, 『農業共済新聞』（「ひとと意見」欄）p.1 2012年6月7日付

〈学会発表・シンポジウム発表〉

〈国内〉

「ESDに関わる社会的アクター：地域づくりとESD」コメンテーター, 日本社会教育学会第59回大会プロジェクト研究「社会教育としてのESD」, 北海道教育大学釧路校 2012年10月6日

「東アジア留学生研究の課題—政治的ポピュリズムを乗り越えるために—」, 日本教育学会第71回大会特別課題研究「東アジアの教育—その歴史と現在—」, 名古屋大学 2012年8月26日

「分館調査から見てきた飯田市公民館の特徴と課題」（新藤浩伸・荻野亮吾・中村由香と共同研究発表）, 日本公民館学会2012年度7月集会（飯田集会）, 飯田市竜丘公民館 2012年7月14日

〈国外〉

「「社区」生涯学習：中国教育発展の未来—人的生存方式和社会的轉型以及城市終身学習—」, 「城市

終身教育與學習共同体建設」国際研究討論会暨楊浦区第六屆學習節，上海市楊浦区學習型社會建設與終身教育促進委員會辦公室・華東師範大學 2012年10月28日

Frontiers of Chinese Education and the Community: Individuals as a process constituting society and “learning”, History and Reality: The Development of Chinese Education in Global Perspectives, 華東師範大學 2012年9月21日-22日

“KIDZUNA” —Re-Building Society through Lifelong Learning: The Character of Learning and Society in Japan, Comparative Education Society of Hong Kong (CESHK) Annual Conference 2013 香港比較教育學會2013年度學術年會 Educationa Reform and Social Change: East-West Dialogue 教育改革與社會變遷—東西方對話—, Yasumuno International Academic Park, The Chinese University of Hong Kong February23, 2013

“KIDZUNA”: Re-creating Society through Lifelong Learning, Europe and Asia Forum on Active Ageing and Intergenerational Solidarity: In Commemoration of 2012 Europe Year of Active Ageing and Solidarity, University Hall Auditorium, National University of Singapore November 30, 2012

## 李 正 連 (准教授)

### 〈論文〉

李正連「韓国人留學生のライフストーリーにみる日本留学の効果と課題」日本教育学会特別課題研究委員会『東アジアの教育—その歴史と現在—(最終報告書)』, 2012年8月, pp.99-113.

李正連「特論：韓国における女性就労支援の現状とその示唆するもの—昨年度の韓国調査結果を基にして—」独立行政法人国立女性教育会館『地域課題の解決と女性の経済的自立に向けて』平成24年度「地域課題の解決と女性の経済的自立に関する調査研究およびプログラム開発」報告書, 2013年3月, pp.117-122.

### 〈翻訳〉

李正連「連動する東アジア, 問題としての朝鮮半島」(白永瑞 [著])『世界』No.831, 岩波書店, 2012年6月, pp.60-70.

李正連「学習体系としての学習社会に関する研究」(韓崇熙 [著])東京・沖縄・東アジア社会教育研究会 (TOAFAEC)『東アジア社会教育研究』

第17号, 2012年9月, pp.186-199.

李正連「地域平生教育活動は私の運命」(李揆仙 [著])『月刊社会教育』No.687, 2013年1月, pp.54-61.

### 〈学会発表〉

李正連「韓国人留學生のライフストーリーにみる日本留学の効果と課題」日本教育学会第71回大会・特別課題研究『東アジアの教育—その歴史と現在—』, 2012年8月26日(名古屋大学).

### 〈その他〉

「東アジアひろば：第2回日中韓生涯学習研究フォーラムに向けて」東京・沖縄・東アジア社会教育研究会 (TOAFAEC)『東アジア社会教育研究』No.17, 2012年9月, pp.287-288.

李正連「平生教育法」社会教育・生涯学習辞典編集委員会編『社会教育・生涯学習辞典』朝倉書店, 2012年11月, p.549.

李正連「おわりに」東京大学教育学部社会教育学研究室2011年度飯田市社会教育調査実習報告書『人の元気でいきるまち—うみだす, ささえる, つなげる, はぐくむ—』, 2013年3月, pp.197-198.

## 新 藤 浩 伸 (講師)

### 〈著書〉

新藤浩伸(共著),『社会教育・生涯学習辞典』(「文化芸術振興基本法」「文化的権利」の項目執筆), 朝倉書店, 2012.

### 〈雑誌論文〉

新藤浩伸(単著),「生涯学習と社会を記述する視点——飯田市公民館調査を題材に——」(牧野篤, 古塚典洋との共著),『東京大学大学院教育学研究科紀要』第52号, 東京大学大学院教育学研究科, 2013, pp.203-232.

新藤浩伸(単著),「戦後社会教育と文化行政」,『月刊社会教育』第57巻第1号, 2013, pp.13-19.

### 〈書評〉

新藤浩伸(単著),「書評 石川徹也・根本彰・吉見俊哉編『つながる図書館・博物館・文書館 デジタル化時代の知の基盤づくりへ』」東京大学出版会, 2011,『文化経済学』第10巻第1号, 文化経済学会(日本), 2013, pp.54-56.

### 〈学会発表〉

新藤浩伸,「1970年代以降のイギリス成人教育における“culture”の変容過程：デヴィッド・ジョーンズの成人教育論に注目して」, 日本社会教育学



会第59回研究大会, 2012年10月7日, 北海道教育  
大学釧路校

新藤浩伸 (牧野篤, 荻野亮吾, 中村由香との共同  
発表), 「分館調査から見えてきた飯田市公民館の  
特徴と課題」, 日本公民館学会2012年度7月集会,  
2012年7月14日, 長野県飯田市竜丘公民館

#### 〈講演等〉

新藤浩伸, 「社会教育と文化行政」, 全国美術館会議  
第41回教育普及研究部会, 2013年3月8日, 松本  
市美術館

新藤浩伸, 「こどもたちにオペラを〜こどもたちが  
オペラを」, 全国劇場・音楽堂等アートマネジメ  
ント研修会2013, 2013年2月14日, 国立オリ  
ンピック記念青少年総合センター

新藤浩伸, 「公民館と地域コミュニティ」, 西東京市  
田無公民館利用者懇談会, 2012年10月12日, 同公  
民館

新藤浩伸, 「現代生活の原型〜「赤い鳥」の時代」,  
市民の歴史学「大正デモクラシーの時代」第5回  
(野田市南部梅郷公民館主催事業), 2012年7月13  
日, 同公民館

新藤浩伸, 「一堂に会する楽しさと危うさ 公会堂の  
歴史を読む」, UTalk (東京大学学際情報学環・福  
武ホール主催), 2012年4月14日, 東京大学情報  
学環・福武ホール1階UTカフェ

#### 〈報告書〉

新藤浩伸 (根本彰と共編), 『小布施町・長野市の生  
涯学習基盤 一図書館, 博物館, まちづくり一  
(東京大学教育学部 2012年度「生涯学習基盤調  
査実習」報告書)』, 東京大学教育学部 教育実践・  
政策学コース, 2013.

新藤浩伸 (単著), 「分館からとらえなおす日常生活  
の拠点の意味」, 『学習基盤社会研究・調査モノ  
グラフ4 自治を支えるダイナミズムと公民館—飯  
田市の公民館分館活動を事例として—』, 東京大  
学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研  
究室, 2012, pp.78-83.

#### 〈その他の業績〉

新藤浩伸 (単著), 「「メセナアワード」受賞なら  
ずも…」, 『月刊はこべ』第430号, 2013, p.12.

新藤浩伸 (単著), 「公民館は地域の顔—市内全公  
民館を訪ねて—」, 公民館だより編集室編『西東  
京市公民館だより』第142号, 西東京市公民館,  
2013, p.4.

#### 荻野亮吾 (特任助教)

##### 〈翻訳書・共訳〉

荻野亮吾「編集ノート」『ナラティブ学習：その輪  
郭と可能性』「大衆文化におけるナラティブ：成  
人教育への批判的示唆」「あとがき」マーシャ・  
ロシター, キャロリン・クラーク編, 立田慶裕・  
岩崎久美子・金藤ふゆ子・佐藤智子・荻野亮吾訳  
『成人のナラティブ学習：人生の可能性を開くア  
プローチ』福村出版, 2012年, pp.13-15, 16-29,  
85-105, 153-154.

荻野亮吾「サービス・ラーニング：学習資源とし  
てのコミュニティ」立田慶裕・平沢安政監訳『学習  
の本質：研究の活用から実践へ』明石書店, 2013  
年, pp.265-290.

##### 〈雑誌論文等〉

荻野亮吾 (単著)「企業と大学のeポートフォリオの  
開発と活用」『文部科学教育通信』第32号, 2012  
年, pp.22-23.

荻野亮吾 (共著)「地域における社会的ネットワー  
クの形成過程に関する研究：飯田市における分館  
活動を事例として」(中村由香との共著)『東京  
大学大学院教育学研究科紀要』第52巻, 2013年,  
pp.233-250.

荻野亮吾 (単著)「携帯電話と生涯学習：『つながる』  
メディアとしての『ケータイ』」立田慶裕 (研究  
代表)『生涯学習の学習需要の実態とその長期的  
変化に関する調査研究』(平成22~24年度調査研  
究報告書) 2013年, pp.207-218.

荻野亮吾 (単著)「政治参加・社会参加に情報活用  
力が与える影響」立田慶裕 (研究代表)『生涯学  
習の学習需要の実態とその長期的変化に関する調  
査研究』(平成22~24年度調査研究報告書) 2013  
年, pp.249-261.

##### 〈学会発表〉

牧野篤・新藤浩伸・荻野亮吾・中村由香「分館調  
査から見えてきた飯田市公民館の特徴と課題」日  
本公民館学会2012年度7月集会, 飯田市竜丘公  
民館, 2012年7月。

##### 〈その他〉

荻野亮吾「飯田市の分館を捉える視点」東京大学  
大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研  
究室 飯田市社会教育調査チーム (牧野篤・荻野  
亮吾・中村由香編)『自治を支えるダイナミズム  
と公民館：飯田市公民館分館活動を事例として』  
(学習基盤社会研究・調査モノグラフ4) 2012年,

pp.12-21.

荻野亮吾・古壕典洋・満都拉・中村由香・園部友里恵・都甲友理絵・山口香苗・石川洋行・加藤毅典「2011年社会教育研究の動向」『日本社会教育学会紀要』第48巻, 2012年, pp.142-151.

荻野亮吾・佐藤智子「公民館をめぐる政策の動向」『日本公民館学会年報』第9号, 2012年, pp.163-166.

荻野亮吾「社会的ネットワークの形成と生涯学習」日本生涯学習研究辞典, 2013年.

## 大学経営・政策コース

山本 清 (教授)

〈著書〉

Prometheus Assessed? Research measurement, Peer review and citation analysis with Shaun Goldfinch Chandos Publishing\* 2012.4.

〈英語論文〉

Re-designing Agencies or De-agencification? 単著 2012.6. 12<sup>th</sup> International Symposium

The Case of Semi-autonomous Public Bodies on Public Sector Management\* in Japan (Berlin)

〈和文論文〉

「政府会計の基盤」 単著 2012. 4. 『政府と非営利組織の会計』(中央経済社) 大塚宗春・黒川 行治編, 第1章, pp.19-50.

「証拠に基づく政策推進の意義と課題」 単著 2012. 4. 『会計検査資料』第559号, pp.45-50.

「会計検査活動とその機能(上)」 単著 2012. 8. 『会計と監査』第63巻第8号 pp.22-28.

「会計検査活動とその機能(下)」 単著 2012. 9. 『会計と監査』第63巻第9号 pp.24-29.

「社会保障と税の一体改革を考える」 単著 2012.11. 『会計検査資料』第566号, pp.28-29.

「地域発展の経済政策—地方財政の現状と課題—」 単著 2012.11. 安田信之助編著『地域発展の経済政策—日本経済再生へむけて』第2章, pp.32-46.

「公務員制度における中立・独立機関の役割」 単著 2013.3. 『人事院月報』No.763, pp.2-5.

「大学の人事管理政策—国立大学法人の人員・人件費調査分析を通じて—」 単著 2013. 3. 『大学経営政策研究』\* 第3号, pp3-13.

「財政統制と政府会計の関係」 単著 2013. 3. 『会計プロフェッション』第8号, pp.59-70.

小方直幸 (准教授)

〈著書〉

小方直幸 2013 「大学教員と経営・管理業務—教職協働時代の大学経営人材養成方策に関する調査から」山本眞一編『教職協働時代の大学経営人材養成方策に関する研究』高等教育研究叢書123, 高等教育研究開発センター, pp.15-27.

小方直幸 2012 「学歴と職業」加野芳正・越智康詞編著『新しい時代の教育社会学』ミネルヴァ書房, pp.186-197.

〈雑誌論文〉

小方直幸 2013 「学士課程教育の日米比較に関する覚書」『大学経営政策研究』第3号, 東京大学大学院教育学研究科, pp.139-152.

小方直幸 2012 「大学教員の授業への構え」『IDE現代の高等教育』No.543, IDE大学協会, pp.53-70.

〈その他〉

Ogata Naoyuki, 2013, "Trends and Prospects of Graduate Survey in Japan" in *Proceedings of International Forum on Students Survey and Assessment of Chinese Higher Education*, Sun Yat-Sen University, pp.54-62.

福留東土 (准教授)

〈著書〉

(編集および分担執筆)

日本比較教育学会編『比較教育学事典』東信堂, 2012年6月.

(分担執筆)

福留東土「米国における大学経営人材—理事と学長に着目して—」山本眞一編『教職協働時代の大学経営人材養成方策に関する研究』高等教育叢書123, 広島大学高等教育研究開発センター, 2013年3月, 41-53頁.

〈雑誌論文〉

福留東土「米国大学のガバナンス構造とその歴史的経緯」IDE大学協会編『IDE・現代の高等教育』2012年11月号, 55-61頁.

福留東土「アメリカの大学評議会と共同統治—カリフォルニア大学の事例」『大学論集』第44集, 広島大学高等教育研究開発センター, 2013年3月, 51-64頁.

福留東土「アメリカの大学における内部質保証—カリフォルニア大学のプログラムレビューを通して—」『KSU高等教育研究』第2集, くらしき作陽大

学高等教育研究センター，2013年3月，33-45頁。

#### 〈報告書〉

福留東土「米国—訪問調査編—」『諸外国の大学の  
教学ガバナンスに関する調査研究—米国・英国・  
フランス—』文部科学省先導的の大学改革推進委託  
事業最終報告書，2012年11月，9-31頁。

#### 〈翻訳〉

シーラ・スローター，ゲーリー・ローズ著，成定薫  
監訳『アカデミック・キャピタリズムとニュー・  
エコノミー』法政大学出版局，2012年11月（分担  
訳：第8・10・11章）。

デイヴィッド・ポスト他著，福留東土・三代川典史  
訳「階級づけられる学問—腐敗と墮落の危機に瀕  
する学術コミュニケーション—」広島大学高等教  
育研究開発センター編『大学論集』第44集，2013  
年3月，319-335頁。

#### 〈その他の業績〉

（意見発表）

大場淳・秦由美子・福留東土「諸外国の大学の教学  
ガバナンスに関する調査研究—米国・英国・フラ  
ンス—」文部科学省中央教育審議会・大学分科会  
（第105回）・大学教育部会（第16回）合同会議，於：  
文部科学省，2012年5月。

### 両角 亜希子（准教授）

#### 〈論文等〉

両角亜希子（単著）「大学経営人材としての職員の  
役割」広島大学高等教育研究開発センター『高等  
教育研究叢書 これからの大学経営～誰がどのよ  
うな役割を担うのか～ 第39回（2011年度）研究  
員集会の記録』2012年4月，No.118，49-64頁

両角亜希子（単著）「個性に合った進路選択を実現  
する「進学型総合学科」（事例：神奈川県立 横  
浜清陸総合高校）」リクルート『カレッジマネジ  
メント』2012年5-6月号，174号，12-15頁

両角亜希子（単著）「私立大学の財政—現状と課題」  
『高等教育研究』第15集，93-113頁

両角亜希子（単著）「長期計画を通じた全学改革の  
推進—龍谷大学第5次長期計画」リクルート『カ  
レッジマネジメント』2012年7-8月号，175号，  
38-41頁

両角亜希子（単著）「シリーズ・大学経営論第1  
回：私立大学の中長期計画」『文部科学教育通信』  
No.296（2012年7月23日号），15-17頁

両角亜希子（単著）「シリーズ・大学経営論第2回：

課題共有の重要性」『文部科学教育通信』No.297  
（2012年8月13日号），24-26頁

両角亜希子（単著）「シリーズ・大学経営論第3  
回：課題共有のための工夫」『文部科学教育通信』  
No.298（2012年8月27日号），24-26頁

両角亜希子（単著）「シリーズ・大学経営論第4回：  
中長期計画を策定する上で重視する点」『文部科  
学教育通信』No.299（2012年9月10日号），15-17  
頁

両角亜希子（単著）「伝統と実績に裏打ちされた学  
部設置（事例：東海学園大学）」リクルート『カ  
レッジマネジメント』2012年9-10月号，176号，  
46-49頁

両角亜希子（単著）「シリーズ・大学経営論第5回：  
達成指標の有用性と留意点」『文部科学教育通信』  
No.300（2012年9月24日号），15-17頁

両角亜希子（単著）「シリーズ・大学経営論第6回：  
中長期計画の実質化をめざして」『文部科学教育  
通信』No.301（2012年10月8日号），12-14頁

両角亜希子（単著）「単年度計画への反映と学内共  
有が将来計画の実質化のカギ」進研アド『Between』  
No.246（10-11月号），3-5頁

両角亜希子（単著）「私大のガバナンス—私大協調  
調査より—」『IDE現代の高等教育』No.545（大学  
ガバナンス再考），35-41頁

両角亜希子（単著）「優秀で多様な学生の獲得を目  
指す（事例：慶應義塾大学）」リクルート『カ  
レッジマネジメント』2012年11-12月号，177号，  
22-25頁

両角亜希子（単著）「急激な“国際化”は何をもた  
らすか—韓国の事例から」『中央公論』2013年2  
月号，64-69頁

両角亜希子（単著）「女子獲得戦略でイメージチェ  
ンジし志願者増へ（事例：国士舘大学）」リクル  
ート『カレッジマネジメント』2013年1-2月号，  
178号，22-25頁

両角亜希子（単著）「私立大学の中長期経営シス  
テム」『私学高等教育研究叢書：中長期経営シス  
テムの確立，強化に向けて』2013年2月，67-100頁

両角亜希子（単著）「マーケットを創出する学部・  
学科の開発（事例：新潟医療福祉大学）」リクル  
ート『カレッジマネジメント』2013年3-4月号，  
179号，38-41頁

両角亜希子（単著）「私立大学の自主性と公共性  
—日韓の私立学校法の比較から—」『大学論集』

2013年3月, 第44集, 179-197頁

#### 〈口頭発表〉

両角亜希子 (講演) 「学校法人制度の特徴と課題—諸外国との比較から」私学高等教育研究所 第52回公開研究会「学校法人の現状とこれからの課題」(2012年6月11日, アルカディア市ヶ谷)

両角亜希子 (講演) 「私立大学の経営戦略について」名古屋大学高等教育研究センター大学院セミナー(2012年7月17日, 名古屋大学)

両角亜希子 (講演) 「日本の私立大学の経営」立命館大学大学行政研究・研修センター大学行政論講義(2013年1月25日, 立命館大学朱雀キャンパス)

両角亜希子 (講演) 「私立大学の中長期経営システム—アンケート調査からわかったこと」私学高等教育研究所第55回公開研究会(2013年3月7日, 私学会館アルカディア市ヶ谷3階, 富士の間)

#### 教育心理学コース

#### 遠藤利彦 (教授)

##### 〈著書〉

氏家達夫・遠藤利彦 (編) (2012). 発達科学ハンドブック5: 社会文化に生きる人間. 新曜社  
〈個人担当章〉「ヒト」と「人」: 生物学的発達論と社会文化的発達論の間 (pp.25-46).

小西行郎・遠藤利彦 (編) (2012). 赤ちゃん学を学ぶ人のために. 世界思想社.  
〈個人担当章〉親子のアタッチメントと赤ちゃんの社会性の発達 (pp.161-191)

小林隆児・遠藤利彦 (編) (2012). 甘えとアタッチメント: 理論と臨床. 遠見書房.  
〈個人担当章〉アタッチメント研究と母子臨床の今日的動向 (pp.167-187)・ジョン・ポウルビィの生涯とアタッチメント理論 (pp.168-194)・生涯発達と発達臨床の視座から見るアタッチメント理論の現在 (pp.195-208)・アタッチメントから見た「甘え」(pp.291-306)・エピローグ—甘えとアタッチメントが織りなす心の綾 (pp.308-311).

小林隆児・遠藤利彦 (編) (2012). 甘えとアタッチメント: 理論と臨床. 遠見書房.  
〈個人担当章〉アタッチメント研究と母子臨床の今日的動向 (pp.167-187)・ジョン・ポウルビィの生涯とアタッチメント理論 (pp.168-194)・生涯発達と発達臨床の視座から見るアタッチメント理論の現在 (pp.195-208)・アタッチメントから見た「甘え」(pp.291-306)・エピローグ—甘えとアタッチメントが織りなす心の綾 (pp.308-311).

小林隆児・遠藤利彦 (編) (2012). 甘えとアタッチメント: 理論と臨床. 遠見書房.  
〈個人担当章〉アタッチメント研究と母子臨床の今日的動向 (pp.167-187)・ジョン・ポウルビィの生涯とアタッチメント理論 (pp.168-194)・生涯発達と発達臨床の視座から見るアタッチメント理論の現在 (pp.195-208)・アタッチメントから見た「甘え」(pp.291-306)・エピローグ—甘えとアタッチメントが織りなす心の綾 (pp.308-311).

##### 〈学術誌論文〉

遠藤利彦 (2012). 発達心理学における発達障害論 (自閉症論): 環境の関与をいかに捉え得るか. 臨床心理学, 12, 345-347.

Morita, N., Nakajima, S., Kazui, M., Endo, T., & Goto, M. (2012). Development of child-care workers' report checklist of post-traumatic symptoms related to child abuse in preschool children. *Acta Criminologicae*

*Medicinae Legalis Japonica*, 78, 104-116.

遠藤利彦 (2013). たかがアタッチメント, されどアタッチメント. 日本児童研究所 (監修), 児童心理学の進歩, 51, 263-267.

遠藤利彦 (2013). 「質」と「量」を組み合わせる. 臨床心理学, 13, 360-364.

##### 〈報告書・紀要論文等〉

遠藤利彦 (2012). 子育て・子育ての基本について考える: アタッチメントと社会性の発達. 子ども学: 甲南女子大学国際子ども学研究センター紀要, 14, 129-156.

遠藤利彦 (2013). 動機づけと社会性の間を情動をもって架橋する. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 59, 27-52.

##### 〈その他論文・記事等〉

遠藤利彦 (2012). 書評: 清水由紀・林創著『他者とのかかわる心の発達心理学』. 児童心理, 2012年12月号, 126.

遠藤利彦 (2013). 書評: 数井みゆき編『アタッチメントの実践と応用: 医療・福祉・教育・司法現場からの報告』. 児童心理, 2013年1月号, 126.

遠藤利彦 (2013). どの子ども大切に: 「時流に動ぜず, 「子どもの目線」で考えることこそが教育現場の役割. 子どもと生きる (東京民研発行), 313, 14-15.

遠藤利彦 (2013). 書評: 山本祐司『すやすやぷー』. 母のひろば (童心の会).

##### 〈学会発表〉

金生由生子・多賀徹太郎・黒田公美・友田明美・池田真理・遠藤利彦 愛着と喪失 Attachment and Loss をめぐって (公開シンポジウム). 日本家族看護学会第19回学術集会 2012年9月8日. 学術総合センター. 話題提供.

杉村和美・松本学・小原倫子・遠藤利彦 発達における変化プロセスと創発の検討 (ワークショップ). 日本心理学会第76回大会発表論文集 WS (3) 2012年9月11-13日 専修大学. 指定討論.

石井佑可子・高橋翠・遠藤利彦・宮崎弦太・伊藤忠弘 リスク・マネジメントとしての対人・社会的認知 (ワークショップ). 日本心理学会第76回大会発表論文集 WS(60) 2012年9月11-13日 専修大学. 指定討論.

石井佑可子・遠藤利彦 青年期前・中期の非行傾向における距離化スキルの機能—逸脱友人要因との関連から— 日本心理学会第76回大会発表論

- 文集 462 2012年9月11-13日 専修大学. ポスター発表.
- 遠藤利彦・石井佑可子・金山好美・高木枝美子・武藤世良 青年期前・中期におけるコミュニケーションの諸相：教育への架け橋を企図して（自主シンポジウムC3）. 日本教育心理学会第54回大会発表論文集 854 2012年11月23-25日 琉球大学. 企画・司会・指定討論.
- 上淵寿・小松孝至・豊田弘司・本山方子・利根川暁子・市川洋子・遠藤利彦 教室における情動：多様な視点から（自主シンポジウムE9）. 日本教育心理学会第54回大会発表論文集 892 2012年11月23-25日 琉球大学. 指定討論.
- 石井佑可子・遠藤利彦 青年期前・中期の非行傾向に関連するコミュニケーションスタイルの検討. 日本教育心理学会第54回大会発表論文集 PB-064 (180) 2012年11月23-25日 琉球大学. ポスター発表.
- 本郷一夫・近藤清美・遠藤利彦・浜谷直人・北川恵・長崎勤 実践現場における発達心理学の役割（大会委員会・編集委員会共同企画シンポジウム）. 日本発達心理学会第24回大会発表論文集 AS2 2013年3月15-17日 明治学院大学白金キャンパス. 指定討論.
- 溝川藍・子安増生・安藤寿康・松井智子・十一元三・遠藤利彦 ころとコミュニケーションの発達—発達支援と教育実践の基礎—（大会委員会企画シンポジウム）. 日本発達心理学会第24回大会発表論文集 AS3 2013年3月15-17日 明治学院大学白金キャンパス. 指定討論.
- 石井佑可子・川本哲也・平野真理・野村晴夫・白井利明・遠藤利彦 人生の変化を考える—何によって、如何に、誰に訪れるのか—（自主企画シンポジウム）. 日本発達心理学会第24回大会発表論文集 SS6-1 2013年3月15-17日 明治学院大学白金キャンパス. 指定討論.
- 中川威・小澤義雄・田渕恵・深瀬裕子・岡本祐子・遠藤利彦 中年期から老年期に渡るGenerativityの発達（自主企画ラウンドテーブル）. 日本発達心理学会第24回大会発表論文集 RT5-1 2013年3月15-17日 明治学院大学白金キャンパス. 指定討論.
- 松本学・中條哲・幸地省子・足立智明・遠藤利彦 先天性疾患が出産後の母親の心理的状态に与える影響. 日本発達心理学会第24回大会発表論文集 P1-031 2013年3月15-17日 明治学院大学白金キャンパス. ポスター発表.
- 石井佑可子・遠藤利彦 青年期における非行傾向と社会的認知の関連. 日本発達心理学会第24回大会発表論文集 P5-047 2013年3月15-17日 明治学院大学白金キャンパス. ポスター発表.
- 〈講演〉
- 遠藤利彦 招待講演：反抗と自律：「ストレス予防接種」の大切さ. 第2回・茅ヶ崎・響きあい教育シンポジウム. 2012年7月25日 茅ヶ崎市教育センター.
- 遠藤利彦 招待講演：ここまで見えた乳児のち・か・ら. 全国私立保育園連盟・平成24年度保育実践セミナー. 2012年11月2日 岡山ロイヤルホテル.
- 遠藤利彦 招待講演：スマホ世代の子育てと乳児保育の課題. 質の高い乳児保育を目指す実践研究会第2回シンポジウム. 2012年11月18日 お茶の水女子大学.
- 遠藤利彦 招待講演：乳児期の育ちの大切さ—アタッチメントを中心に—. 2012年度目黒区保育園職員研修会. 2012年12月14日 中目黒住区センター.
- 遠藤利彦 招待講演：発達臨床的視座から見るアタッチメント—子どもの種々の問題と支援との関連も含め—. 厚木児童相談所情緒障害児訓練事業研修会. 2013年1月19日 神奈川県厚木合同庁舎.
- 遠藤利彦 招待講演：子どもの発達と教育のデジタル化. 第29回教科書を考えるシンポジウム. 2013年2月17日 出版労連大会議場（東京都文京区）.
- 遠藤利彦 招待講演：アタッチメントの病理と障害—その基本的理解と支援に向けて—. 平成24年度治療機関・施設専門職員研修会講演会. 2013年2月21日 子どもの虹情報研修センター.
- 岡田 猛（教授）
- 〈著書〉  
無し
- 〈雑誌論文〉  
縣拓充・岡田猛（2013）. 創造の主体者としての市民を育む：「創造的教養」を育成する意義とその方法 *認知科学*, 20 (1), 27-45.  
石黒千晶・岡田猛（2013）. 初心者写真創作にお

ける”表現の自覚性”獲得過程の検討：他者作品模倣による影響に着目して. *認知科学*, 20 (1), 90-111.

高木紀久子・岡田猛・横地早和子 (2013). 美術家の作品コンセプトの生成過程に関するケーススタディ：写真情報の利用と概念生成との関係に着目して *認知科学*, 20 (1), 59-78.

高木紀久子・岡田猛・横地早和子 (2013). 美術家の作品コンセプトの生成過程に関するケーススタディ：写真情報の利用と概念生成との関係に着目して *認知科学*, 20 (1), 59-78.

岡田猛 (2013). 芸術表現の捉え方についての一考察：「芸術の認知科学」特集号の序に代えて. *認知科学*, 20 (1), 10-18.

杉本覚・岡田猛 (2013). 美術館におけるワークショップスタッフ初心者の認識の変化：東京都現代美術館ワークショップ“ボディー・アクション”への参加を通して *美術科教育学会誌「美術教育学」*, 34, 261-275.

岡田猛・縣拓充 (2013). 芸術表現を促すということ：アート・ワークショップによる創造的教養人の育成の試み. *KEIO SFC JOURNAL*, 12 (2), 61-73.

中野優子・岡田猛 (2012). 即興表現を中心としたダンス授業実践とその効果：大学生の心理的変容に注目して *舞踊学*, 35, 52-63.

#### 〈査読付き国際学会発表〉

Yokochi, S., Okada, T. & Ishibashi, K. (2012). A painter's eye movements during creative painting. *1st Visual Science of Art Conference*, Alghero, Italy.

Ishibashi, K. & Okada, T. (2012). Imitation, inspiration and creation: Cognitive process of creative drawing by copying others' artworks. *1st Visual Science of Art Conference*, Alghero, Italy.

Shimizu, D. & Okada, T. (2012). Creative Process of Improvised Street Dance. *Proceedings of the 34th Annual Meeting of the Cognitive Science Society*, 2321-2326. Sapporo, JAPAN.

Nakano, Y. & Okada, T. (2012). Process of Improvisational Contemporary Dance. *Proceedings of the 34th Annual Meeting of the Cognitive Science Society*, 2073-2078. Sapporo, JAPAN.

Ishiguro, C. & Okada, T. (2012). Emergence of control in artistic expressions and the process of expertise. *Proceedings of the 34th Annual Meeting of the*

*Cognitive Science Society*, 1733-1738. Sapporo, JAPAN.

#### 〈国際学会（査読無し）及び国際シンポジウム等〉

Nakano, Y & Okada, T. (2012). Improvisation in Contemporary Dance – What happens during improvisational dance? *2nd International Workshop on Brain inspired computing*, Ibaraki, JAPAN.

Shimizu, D & Okada, T. (2012). Emergence of New Movements in Street Dance Improvisation. *2nd International Workshop on Brain inspired computing*, Ibaraki, JAPAN.

Struzik, Z. R., Nakano, Y., Shimizu, D., Okada, T. & Ruthkowski, T.M. (2012). Alpha-rhythm correlates with inspiration during dance improvisation *2nd International Workshop on Brain inspired computing*, Ibaraki, JAPAN.

#### 〈招待講演等〉

“The role of inspiration in artistic creation” 2<sup>nd</sup> International workshop on Brain Inspired Computing. National Institute for Materials Science, Ibaraki Japan., 2012, 6, 4, Invited Speaker.

#### 佐々木 正 人 (教授)

##### 〈著書〉

隈研吾編 『つなぐ建築』岩波書店 2012

佐々木正人・ジョスリーヌ・モンブティ・宇野邦一 (立教大学心理芸術人文科学研究会編) 知覚のエコソフィー：生態心理学とダンスからの提言 せりか書房 2013

日本発達心理学会編 発達科学ハンドブック1：発達心理学と隣接領域の理論・方法論 (山崎寛恵・佐々木正人 生態学的知覚論の考え方：発達の視座から 84-97) 新曜社 2013

##### 〈学会誌〉

渋谷友紀・森田ゆい・福田玄明・植田一博・佐々木正人 (2012) 文楽人形遣いにおける呼吸と動作の非同期的関係：日本の古典芸能における「息づかい」の特殊性 *認知科学* 19 (3) 337-364

##### 〈一般雑誌〉

佐々木正人 2012 「高速道路のアフォーダンス」 *首都高* vol.9 2012 18-19

佐々木正人 2012 意識の横にある無意識—マイクロスリップ考 *文学* 2012 13 (6) 31-40 岩波書店

佐々木正人 2013 マクロをもっとふくらませる—

ギブソン『生態学的知覚システム』の転回 東大出版会UP 2013年2月号

佐々木正人 2013 21世紀デザインの兆し (FOMS 編 コミュニケーション・デザイン書評) 図書新聞 3月9日号

#### 南風原 朝 和 (教授)

##### 〈著書〉

南風原朝和 (分担執筆), 「発達科学の心理統計」, 高橋恵子・湯川良三・安藤寿康・秋山弘子 (編) 『発達科学入門1 理論と方法』, 東京大学出版会, 2012年6月, pp.239-253.

##### 〈学会発表等〉

南風原朝和 (チュートリアルセミナー指定討論), 「効果量のrelevanceと統合的理解」, 日本教育心理学会第54回総会, 2012年11月. (『教育心理学年報』第52集, p.237.)

南風原朝和 (ワークショップ), 「臨床心理学の量的研究法入門—研究立案のためのガイド」, 現代臨床心理学の必須技能ワークショップ, 2012年11月.

#### 針 生 悦 子 (准教授)

##### 〈学術論文〉

Haryu, E. & Kajikawa, S. Are higher-frequency sounds brighter in color and smaller in size? Auditory-visual correspondences in 10-month-old infants. *Infant Behavior and Development*, 35(4), pp.727-732. 2012年12月.

##### 〈学会発表〉

針生悦子 「単語の切り出しから語彙学習への道すじ」 日本赤ちゃん学会第12回学術集会, 玉川大学, 東京. 2012年6月.

姜露・針生悦子 「因果事象・非因果事象の記述に使われる項構造: 中国人養育者の子どもへの発話に着目して」 言語科学会第14回年次国際大会, 名古屋大学, 愛知. 2012年6月.

Ohtake, Y. & Haryu, E. 2012 The vowel-size relationship re-examined using speeded classification. *The 34 Annual Conference of the Cognitive Science Society*. Sapporo, Japan. 2012年8月.

大竹裕香・針生悦子 「乳児におけるモノの動きと同期したラベリングの理解」 日本心理学会第76回大会, 専修大学, 東京. 2012年9月.

針生悦子 (招待) 「擬音語の“音感覚”はどこから

くるのか」 日本基礎心理学会第31回大会, 九州大学, 福岡. 2012年11月.

針生悦子 「擬音語感覚を育むもの—かな文字, そして, 養育者のことば」 日本教育心理学第54回総会 (シンポジウム話題提供) 琉球大学, 沖縄. 2012年11月.

山本寿子・針生悦子 「24ヶ月児における同音異アクセント語の学習」 日本発達心理学会第24回大会, 明治学院大学, 東京. 2012年3月.

金重利典・針生悦子 「表情が乳児の人物選好に与える影響—乳児は笑っていた人物を好むのか?—」 日本発達心理学会第24回大会, 明治学院大学, 東京. 2012年3月.

##### 〈その他〉

針生悦子・今井むつみ 「著者による原著の紹介」 (pp.246-249) 「書評にこたえて」 (pp.271-278) 平木典子・稲垣佳世子・河合優年・斎藤こずゑ・高橋恵子・湯川良三 (編) 「児童心理学の進歩 2012年版」, 金子書房. 2012年6月.

針生悦子 「“語彙爆発=ただ一つの変曲点”は幻なのか」 (コメント論文) ベビーサイエンス, 12, 57-59. 2013年3月.

#### 臨床心理学コース

##### 下山 晴 彦 (教授)

##### 〈著書: 共著/編著/監修〉

下山晴彦 (共編), 『発達障害支援必携ガイドブック—問題の柔軟な理解と的確な支援のために—』 (村瀬 嘉代子氏との共編), 金剛出版, 2013, pp.509.

下山晴彦 (共編), 『迷わず学ぶ 認知行動療法ブックガイド』 (林 潤一郎氏との共編), 岩崎学術出版社, 2012, 総頁数 200.

下山晴彦 (監修), 『面白いほどよくわかる! 臨床心理学』, 西東社, 2012, 総頁数303.

##### 〈雑誌: 特集企画〉

下山晴彦 (共著), 「対人援助職の必須知識: 精神医療を知る」 (中嶋 義文氏との共著), 『臨床心理学13(1)』, 2013, pp.106-163.

下山晴彦 (単著), 「災害トラウマからの回復に向けて」 『臨床心理学, 12(2)』, 2012, pp.165-217.

##### 〈訳書〉

下山晴彦 (監訳), 『子どもと家族のための認知行動療法1うつ病』, 誠信書房, 2013, 総頁数 220. (Verduyn, C., Rogers, J., & Wood, A., Depression:

- Cognitive Behaviour Therapy with Children and Young People, 2009, Routledge.)
- 下山晴彦 (監訳), 『子どもと家族のための認知行動療法 2 不安障害』, 誠信書房, 2013. 総頁数220. (Stallard, P., Anxiety : Cognitive Behaviour Therapy with Children and Young People, 2009, Routledge.)
- 下山晴彦 (監訳) 『認知行動療法臨床ガイド』, 金剛出版, 2012, 総頁数447. (Westbrook,D., Kennerley,H., & Kirk,J, An Introduction to Cognitive Behaviour Therapy: Skills and Applications, 2011, Sage Publications.)
- 〈論文 : 専門誌〉**
- 下山晴彦 (共著), 「心理職が医療領域で働くために」 (中嶋 義文氏との共著), 『臨床心理学, 13(1)』, 2013, pp.6-12.
- 下山晴彦 (単著), 「臨床心理大学院における病院研修—大学病院での実習を中心に」, 『臨床心理学 13(1)』, 2013, pp.95-100.
- 下山晴彦 (共著), 「Rumination-focused CBT—新しい認知行動療法の理論と応用—」 (梅垣 佑介氏・野津 弓起子氏・高柳 めぐみ氏・羽澄 恵氏・堤 亜美氏・遠藤 麻美氏との共著), 『東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要 36』, 2013, pp.17-24.
- 下山晴彦 (共著), 「インターネットを用いた認知行動療法の最新レビューと今後の展望」 (菅沼 慎一郎氏・梅垣 佑介氏・安 婷婷氏・小倉 加奈子氏との共著), 『東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要 36』, 2013, pp.25-32.
- 下山晴彦 (共著), 「ERPが進むとき—子どもOCDプログラムを担当したセラピストの語りの分析—」 (矢野 玲奈氏・小倉 加奈子氏・安 婷婷氏・松田 なつみ氏との共著) 『東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要 36』, 2013, pp.84-91.
- 下山晴彦 (共著), 「適応指導教室における心理教育実践—自己効力感向上を目的として—」 (堤 亜美氏・大上 真礼氏・河合 輝久氏との共著) 『東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要 36』, 2013, pp.42-50.
- 下山晴彦 (共著), 「職場の非制度的慣習と個人の労働観に関するグループインタビュー」 (川崎 舞子氏・高山 由貴氏・中野 美奈氏・高岡 佑壮氏・野津 弓起子氏・樋口 紫音氏との共著) 『東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要 36』, 2013, pp.67-75.
- 下山晴彦 (共著), 「多職種協働における臨床心理職の役割 I —協働に関する論文レビューから—」 (川崎 隆氏・能登 眸氏・砂川 芽吹氏・矢野 玲奈氏との共著), 『東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要 36』, 2013, pp.51-58.
- 下山晴彦 (共著), 「多職種協働における臨床心理職の役割 II —近接領域からみた協働の位置づけ—」 (羽澄 恵氏・高柳 めぐみ氏・榎原 潤氏・高木 郁彦氏・川崎 隆氏との共著), 『東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要 36』, 2013, pp.59-66.
- 下山晴彦 (共著), 「大学生活における困り感とその支援の検討—発達障害傾向を視野に入れて—」 (砂川 芽吹氏・野中 舞子氏・高岡 佑壮氏・藤尾 未由希氏との共著), 『東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要 36』, 2013, pp.33-41.
- 下山晴彦 (共著), 「学校現場における相談活動のイメージに関する検討—スクールカウンセラーを主軸として—」 (高木 郁彦氏・樋口 紫音氏・遠藤 麻美氏・河合 輝久氏・大上 真礼氏との共著), 『東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要 36』, 2013, pp.76-83.
- Haruhiko Shimoyama (共著), 「Working with CBT across Cultures in Clinical Psychology: With Particular Reference to Japanese Clinical Psychology (1)」 (Susan Llewelyn 氏との共著), 『臨床心理学, 12(2)』, 2012, pp.214-217.
- Haruhiko Shimoyama (共著), 「Working with CBT across Cultures in Clinical Psychology: With Particular Reference to Japanese Clinical Psychology (2)」 (Susan Llewelyn 氏との共著), 『臨床心理学, 12(3)』, 2012, pp.415-421.
- Haruhiko Shimoyama (共著), 「Working with CBT across Cultures in Clinical Psychology: With Particular Reference to Japanese Clinical Psychology (3)」 (Susan Llewelyn 氏との共著), 『臨床心理学, 12(4)』, 2012, pp.580-589.
- 下山晴彦 (単著), 「臨床心理アセスメントを学ぶ」, 『臨床心理学増刊 4号』, 2012, pp.35-41.
- 下山晴彦 (単著), 「災害に対する包括支援システムの構築に向けて」, 『臨床心理学12巻 6号』, 2012, pp.165-170.



## 能智正博(教授)

## 〈雑誌論文〉

能智正博(単著),『『被災者の声』はどのように語られるか(1)ーディスコース分析から臨床心理学的実践へー』,『東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要』第35号,2012,pp.148-156

## 〈学会発表〉

能智正博・川野健治・大倉得史・藤岡勲・やまだようこ(シンポジウム),「質的な分析に対話をどのように生かしていけるのか」,日本質的心理学会第9回大会抄録集,2012,pp.40-41.

能智正博・北村篤司・向後裕美子(ポスター発表),「『被災者の声』はどのように語られるか(1)ー震災と喪失をめぐるディスコース」,日本質的心理学会第9回大会抄録集,2012,p.67

## 〈講演・シンポジウム等〉

Bamberg, M.・鈴木聡志・大橋靖史・能智正博(シンポジウム),「ナラティブ分析の挑戦ーアイデンティティ研究への一視点」,東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース,2012

能智正博(チュートリアル),「質的研究法」,日本臨床心理士会臨床心理センター講座,2012

Hermans, H.・Hermans-Konopka, A.・高橋美保・石丸徑一郎・能智正博(シンポジウム),「対話的自己理論と心理臨床実践」,東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース,2012

能智正博(招待講演),「なぜ親子はわかりあうことが難しいのかー心理専門職に学ぶコミュニケーション術」,木更津高等専門学校,2012.

能智正博(チュートリアル),「臨床心理学における質的研究法入門ーナラティブからモデル生成へ」,現代臨床心理学の必須技能ワークショップ,2012

能智正博(招待講演),「質的研究法入門ー矯正教育のより深い理解のために」,東京鑑別所研究集会,2013

能智正博(招待講演),「支援の場における『聴く力』」,いろえんぴつコミュニティズ第27回心理福祉セミナー,2013

## 〈書評等〉

能智正博(解説)「わたしの障害受容論~援助者として障害を受容するとは?」,NPO法人いろえんぴつ心理福祉コミュニティズ編『心理福祉学の実践2ー会報『えんかれっじ』からたどる地域生活支援』,NPO法人いろえんぴつ心理福祉コミュニティズ出版部,2012,pp.56-58

能智正博(書評)平川克美著『俺に似たひと』(医

学書院),『心と社会』第43巻4号,日本精神衛生会,2012,pp.131-132.

能智正博(巻頭言),「最前線の声を聴く」,『質的心理学研究』第12巻,日本質的心理学会,2013,pp.1

## 高橋美保(准教授)

## 〈著書〉

高橋美保(分担執筆),「新世代の認知行動療法」,『下山晴彦(著),林潤一郎(著)迷わず学ぶ 認知行動療法ブックガイド(臨床心理学実践コレクション)』,岩崎学術出版 2012,pp.28-29.

高橋美保(分担訳),「第16章 CBTの新たな提供方法」,『下山晴彦(監訳)認知行動療法臨床ガイド』,金剛出版(Westbrook, D., Kennerley, H., and Kirk, J. (2011) An Introduction to Cognitive Behaviour Therapy Skills and Applications. Second Edition. London: Sage Publication Ltd.), 2012, pp.357-372.

高橋美保(分担訳),「第17章 CBTの新たな展開」,『下山晴彦(監訳)認知行動療法臨床ガイド』,金剛出版(Westbrook, D., Kennerley, H., and Kirk, J. (2011) An Introduction to Cognitive Behaviour Therapy Skills and Applications. Second Edition. London: Sage Publication Ltd.), 2012, pp.373-396.

高橋美保(分担訳),「第19章 CBTにスーパーヴィジョンを用いる」,『下山晴彦(監訳)認知行動療法臨床ガイド』,金剛出版(Westbrook, D., Kennerley, H., and Kirk, J. (2011) An Introduction to Cognitive Behaviour Therapy Skills and Applications. Second Edition. London: Sage Publication Ltd.), 2012, pp.409-424.

## 〈雑誌論文〉

高橋美保(共著),「失業者に対する意識ー失業者に対するスティグマ尺度の作成ー」(森田慎一郎氏・石津和子氏との共著),『心理学研究』83,2012,pp.100-107.

高橋美保(共著),「働くことの意味づけと職業への志向に関する日本とカナダの大学生比較」(森田慎一郎氏・石津和子氏との共著),『キャリアデザイン研究』8,2012,pp.183-193.

高橋美保(共著),「大学生における働くことの意味の日中比較」(森田慎一郎氏・石津和子氏との共著),『臨床心理学』13-2,pp.247-258.

高橋美保(単著),「産業領域の臨床心理学」,『駒沢学園心理相談センター主催セミナー講演録』2,2013,pp.57~68.

### 〈学会発表〉

森田慎一郎・高橋美保・石津和子, 「正規雇用者と非正規雇用者と失業者の労働観比較」(ポスター発表), 『日本心理学会第76回大会』, 日本心理学会第75回大会発表論文集, 2012. 9.

石津和子・森田慎一郎・高橋美保, 「ライフキャリアレジリエンス(2)ーライフキャリアレジリエンスを用いた中高生の比較ー」(ポスター発表), 『日本心理学会76回大会』, 日本心理学会第75回大会発表論文集, 2012.9.

高橋美保・森田慎一郎・石津和子, 「失業者に対するスティグマが失業者のメンタルヘルスに及ぼす影響」(ポスター発表), 『日本コミュニティ心理学会第15回大会』, 2012. 7, コミュニティ心理学会第15回大会プログラム・発表論文集 pp.58-59.

高橋美保, 「日本人の働く価値観の見直しと心理支援の現在」(シンポジスト), 『社会で取りこむうつ病の予防と開発ーICTの活用による“心”のバリアフリーを目指して』, 東京大学教育学研究科附属バリアフリー教育開発センターシンポジウム, 2012. 11.

高橋美保, 「シンポジウムⅢ: 森田療法とうつ病治療 社会復帰に活かす森田療法」(シンポジスト), 『第30回日本森田療法学会』, 2012. 11.

### 〈シンポジウム等〉

Miho Takahashi, Mental health of the unemployed in Japan from the viewpoint of the latent and manifest benefit of employment (poster presentation), The 3<sup>rd</sup> Asia Pacific Expert Workshop on Psychosocial Factors at Work, 2012. 7.

### 〈その他の業績〉

高橋美保(単著), 「新世代の認知行動療法 熊野宏昭著(書評)」, 『臨床心理学』12-5, 2013, 755.

高橋美保, 「展望: 重要性が増すメンタルヘルスの予防策」(インタビュー), 『RMSmessage 28』, 株式会社リクルートマネジメントソリューションズ, 2012, pp.35-36.

高橋美保, 「しなやかに生きるための柔軟性: ライフキャリア・レジリエンス」(インタビュー), 『ワークスシンポジウム2012インタラクティブセッションー停滞から成長へ解決策を探るー 分科会B-2資料』, 株式会社リクルートワークス, 2012.

### 石丸 径一郎(講師)

#### 〈著書〉

石丸径一郎(共著), 「同性愛」, 日本発達心理学会(編)『発達心理学事典』, 丸善出版, 2012, pp206-207. (事典項目)

#### 〈雑誌論文〉

石丸径一郎(共著), 「アメリカ心理学会(APA)特別専門委員会における『性指向に関する適切な心理療法的対応』の報告書要約」(佐々木掌子・平田俊明・金城理枝・長野 香・梶谷奈生・品川由佳・角田洋隆・柘植道子・葛西真記子との共著), 心理臨床学研究, 30(5), 2012, pp763-773.

石丸径一郎(単著), 「非典型的な性別のあり方を希望する主訴について」, 『日本性科学会ニュース』, 31(2), 2012, p2.

Ishimaru, K. (学会発表) Incongruence between self and experience in LGB people. (Ohno, R.との共著), 12th Asia-Oceania Congress of Sexology, Oral Session 7, Matsue, Japan August 4, 2012.

### 平野 真理(特任助教)

#### 〈雑誌論文・紀要〉

平野真理(単著), 「生得性・後天性の観点からみたレジリエンスの展望」, 『東京大学大学院教育学研究科紀要』第52巻, 2013, pp. 413-420.

平野真理(単著), 「心理的感性に対するレジリエンスの緩衝効果の検討ーももとの「弱さ」を後天的に補えるかー」, 『教育心理学研究』第60巻, 2012, pp.343-354.

平野真理(単著), 「二次元レジリエンス要因の安定性およびライフイベントとの関係」, 『パーソナリティ研究』第21巻, 2012, pp.93-96.

平野真理(共著), 「病院集団療法に心理士が参入する際の困難と工夫ーデイケア実習での体験からー」(川崎隆・高柳めぐみ・羽澄恵・榎原潤・野津弓起子・下山晴彦との共著), 『東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要』第35巻, 2012, pp.104-114.

#### 〈学会発表〉

平野真理(話題提供者), 「『立ち直れない人』はどのように『立ち直れる人』に変われるか」, 第24回日本発達心理学会大会自主シンポジウム“人生の変化を考えるー何によって、如何に、誰に訪れるのかー”

平野真理, 「資質的・獲得的レジリエンス要因と傷

つきへの対処—コーピングおよび求めるサポートの個人差の検討—, 『日本心理学会第76回大会発表論文集』, 2012, pp.55.

川崎隆・平野真理・榎原潤・下山晴彦, 「病院集団療法に心理実習生が参入する際の困難と工夫—協働場面における“関わり”をどう学べるか—」, 『日本心理学会第76回大会発表論文集』, 2012, pp.416.

#### 〈分担執筆〉

平野真理, 「認知行動療法におけるレジリエンスと症例の概念化」 in 下山晴彦・林純一郎 (編) 『迷わず学ぶ—認知行動療法ブックガイド』, 岩崎学術出版社, 2012, pp.104-105.

平野真理, 「統合失調症のための集団認知行動療法」 in 下山晴彦・林純一郎 (編) 『迷わず学ぶ—認知行動療法ブックガイド』, 岩崎学術出版社, 2012, pp.138-139.

平野真理, 「摂食障害の認知行動療法」 in 下山晴彦・林純一郎 (編) 『迷わず学ぶ—認知行動療法ブックガイド』, 岩崎学術出版社, 2012, pp.180-181.

#### 〈その他〉

平野真理 (単著), 「書評: W・クレイン, C・A・パデスキー, R・ダッドリー著 『認知行動療法におけるレジリエンスと症例の概念化』」, 『精神療法』第38巻, 2012, pp.719-720.

#### 身体教育学コース

#### 多賀 巖太郎 (教授)

#### 〈雑誌論文〉

S. Sasai, F. Homae, H. Watanabe, A.T. Sasaki, H. Tanabe, N. Sadato, G. Taga: A NIRS-fMRI study of resting state network. *NeuroImage* 63, 179-193, 2012

H. Watanabe, F. Homae, T. Nakano, D. Tsuzuki, L. Enkhtur, K. Nemoto, I. Dan, G. Taga: Effect of auditory input on activations in infant diverse cortical regions during audio-visual processing. *Human Brain Mapping* 34, 543-565, 2013

多賀巖太郎: 脳と行動の初期発達における自発性と社会性, *日本生物学的精神医学会誌* 23: 245-248, 2012

多賀巖太郎: ヒトの脳の巨視的構造と機能の発達, *日本神経回路学会誌* 20, 23-27, 2013

#### 〈その他〉

多賀巖太郎: 睡眠の発達脳科学, 第37回日本睡眠学会シンポジウム, 横浜, 2012. 6. 28 (招待)

多賀巖太郎: ヒト乳児における発達脳科学の現状と課題, 第39回日本毒性学会シンポジウム「子どもの毒性学」, 仙台, 2012. 7. 17 (招待)

多賀巖太郎: 脳と身体の初期発達, 第4回ニューロ・リハ・ロボ研究会, 仙台, 2012. 7. 18 (招待)

多賀巖太郎: 脳と行動の初期発達, 生物学的精神医学会, 神戸, 2012. 7. 22 (招待)

多賀巖太郎: NIRSによる脳の機能的ネットワークのイメージング, 第15回日本光脳機能イメージング研究会, 東京, 2012. 7. 28 (招待)

G. Taga: Developmental cognitive neuroscience approach to learning and teaching. 7<sup>th</sup> International Summer School of Mind, Brain and Education, Erice, Italy, Aug. 1, 2012 (invited)

G. Taga: NIRS imaging of spatiotemporal activity in the developing brain. fNIRS meeting, London, UK, Oct. 28, 2012 (invited)

多賀巖太郎: 乳児の行動発達研究の最新トピック—GMs評価を中心に—, 豊橋カンファレンス, 豊橋, 2012. 11. 4 (招待)

G. Taga: Spontaneous activity of the developing brain. Measuring consciousness – Theory and Experiments, Kyoto, Japan, Mar. 25, 2013 (invited)

#### 野崎 大地 (教授)

#### 〈著書〉

野崎大地 (編著), 『運動療法ガイド第5版』 (小松泰喜氏との共編), 日本医事新報社, 2012, 総頁数 282.

#### 〈雑誌論文〉

Honda T, Hirashima M & Nozaki D, “Adaptation to Visual Feedback Delay Influences Visuomotor Learning.” *PLoS One*, 2012, Vol.7(5), e37900.

Hirashima M & Nozaki D, “Learning with slight forgetting optimizes sensorimotor transformation in redundant motor systems.” *PLoS Computational Biology*, 2012, Vol.8(6), pp.432-436.

Honda T, Hirashima M & Nozaki D, “Habituation to feedback delay restores degraded visuomotor adaptation by altering both sensory prediction error and the sensitivity of the adaptation to the error”, *Frontiers in Perception Science*, 2012, 3, pp.540.

野崎大地 (単著), 「運動制御・学習の脳内過程がもつ冗長性」, *Japan Journal of Rehabilitation Medicine (リハビリテーション医学)*, 2012, 49-10号,

pp.679-682.

〈その他の業績〉

野崎大地, 「上肢到達運動の制御と学習: リハビリテーション応用可能性を見据えて」, 長野県上田市, 2012. 9. 1, 第2回鹿教湯神経脳科学セミナー  
野崎大地, 「上肢到達運動の制御と学習: リハビリテーション応用可能性を見据えて」, 東京, 2013. 3. 31, 第3回脳神経科学セミナー運動神経科学研究会

山本 義春 (教授)

〈論文〉

Nakamura, T., T. Takumi, A. Takano, F. Hatanaka, and Y. Yamamoto. Characterization and modeling of intermittent locomotor dynamics in clock gene-deficient mice. *PLoS ONE* 8: e58884-1-8, 2013.  
Kim, J., H. Kikuchi, and Y. Yamamoto. Systematic comparison between ecological momentary assessment and day reconstruction method for fatigue and mood states in healthy adults. *British Journal of Health Psychology* 18: 155-167, 2013.  
Ogata, H., K. Nakamura, M. Sato, K. Tokuyama, S. Nagasaka, N. Ebine, K. Kiyono, and Y. Yamamoto. Lack of negative correlation in glucose dynamics by NEAT restriction in healthy adults. *Medicine & Science in Sports & Exercise* 45: 60-66, 2013.  
Kikuchi, H., K. Yoshiuchi, Y. Yamamoto, G. Komaki, and A. Akabayashi. Diurnal variation of tension-type headache intensity and exacerbation: An investigation using computerized ecological momentary assessment. *BioPsychoSocial Medicine* 6: 18-1-7, 2012.  
Sano, W., T. Nakamura, K. Yoshiuchi, T. Kitajima, A. Tsuchiya, Y. Esaki, Y. Yamamoto, and N. Iwata. Enhanced persistency of resting and active periods of locomotor activity in schizophrenia. *PLoS ONE* 7: e43539-1-7, 2012.  
Ogata, H., K. Tokuyama, S. Nagasaka, T. Tsuchita, I. Kusaka, S. Ishibashi, H. Suzuki, N. Yamada, K. Hamano, K. Kiyono, Z. R. Struzik, and Y. Yamamoto. The lack of long-range negative correlations in glucose dynamics is associated with worse glucose control in diabetes mellitus patients. *Metabolism* 61: 1041-1050, 2012.  
Yamamoto, Y. Allostasis, Allostatic Load. In: *Encyclopedia of Behavioral Medicine*, Gellman, M.

and J. R. Turner, editors. Springer, New York, 2012.

〈招待講演・シンポジウム講演〉

Yamamoto, Y. Of mice and men — Universality in behavioral organization (Invited Talk). *The 16th Congress of International Society for Biomedical Research on Alcoholism*. Sapporo, Japan (September, 2012).

東郷 史治 (准教授)

〈著書〉

東郷史治 (単著), 「脳血管・神経疾患の運動療法—うつ・不眠状態」, 『運動療法ガイド』, 武藤芳照監修, 日本医事新報社, 2012, pp.209-213.  
東郷史治 (単著), 「体力・運動能力の測定・評価」, 『運動療法ガイド』, 武藤芳照監修, 日本医事新報社, 2012, pp.42-47.  
東郷史治 (単著), 「有酸素トレーニングの基礎と実践」, 『運動療法ガイド』, 武藤芳照監修, 日本医事新報社, 2012, pp.48-52.  
東郷史治 (単著), 「職員のストレスマネジメント」, 『転倒・転落を防ぐセーフティマネージメント』, 小松泰喜, 石川ふみよ編, 金原出版株式会社, 2012, pp.51-58.  
東郷史治 (単著), 「職員のストレスマネジメント」, 『転倒・転落を防ぐセーフティマネージメント』, 小松泰喜, 石川ふみよ編, 金原出版株式会社, 2012, pp.122-130.  
東郷史治 (単著), 「転倒のメカニズム」, 『転倒・転落を防ぐセーフティマネージメント』, 小松泰喜, 石川ふみよ編, 金原出版株式会社, 2012, pp.135-136.

〈雑誌論文〉

Togo, F. (共著), 「Heart rate variability during sleep and subsequent sleepiness in patients with chronic fatigue syndrome」, (B.H. Natelson氏との共著), 『Autonomic Neuroscience: Basic and Clinical』 第176巻, 2013, p.85-90.  
Togo, F. (共著), 「Effects on employees of controlling working hours and working schedule」, (T. Kubo, M. Takahashi, X. Liu, A. Shimazu, K. Tanaka, M. Takaya氏との共著), 『Occupational Medicine』 第63巻, 2013, p.148-151.  
Togo, F. (共著), 「Responses to exercise differ for chronic fatigue syndrome patients with fibromyalgia」, (D.B. Cook, A.J. Stegner, P.R. Nagelkirk, J.D. Meyer, B.H.

Natelson氏との共著), 『Medicine & Sciences in Sports & Exercise』第44巻, 2012, p.1186-1193.

Togo, F. (学会発表), 「Very short-term heart rate variability during sleep in patients with chronic fatigue syndrome」, 『Sleep』第35巻, 2012, pp.A314.

Togo, F. (学会発表), 「Attentional network task performance and fear of falling in older Japanese adults」第52巻, 2012, pp.S330.

## 森田賢治(講師)

〈著書〉

なし

〈雑誌論文〉

Kenji Morita, Mieko Morishima, Katsuyuki Sakai, Yasuo Kawaguchi. "Reinforcement learning: computing the temporal difference of values via distinct corticostriatal pathways." Trends in Neurosciences 35 (2012) pp.457-467.

## 教職開発コース

### 秋田喜代美(教授)

〈著書〉

秋田喜代美(単著), 『学びの心理学: 授業をデザインする』, 左右社, 総頁241. 2012

秋田喜代美(共著)『教える空間から学び合う場へ: 授業をデザインする』(牧田秀昭との共著) 東洋館出版 総頁194. 2012

秋田喜代美(単著), 「保育の質とは何か」(日本発達心理学会・編), 『発達科学ハンドブック6 発達と支援』, 新曜社, 2012, pp.73-81.

秋田喜代美(共著), 『葛藤場面からみる保育者の専門性の探究』(野間教育研究所紀要52集, 安見克夫・増田時枝・中坪史典・砂上史子・箕輪潤子氏との共著 1章, 終章担当), 野間教育研究所幼児教育研究部会, 2013, 総頁315.

秋田喜代美(単著), 「海外の乳幼児保育政策動向から見た日本の保育のこれから—子ども・子育て新システムが置かれている文脈と課題」, 『平成24年度版 保育所問題資料集』, (社)全国私立保育園連盟, 2012, pp.16-22.

秋田喜代美(単著), 「校内研修での授業研究の充実を一専門家の知の共同構成のために—」(村川雅弘・編), 『ワークショップ型校内研修 充実化・活性化のための戦略・プラン43』, 教育開発研究所, 2012, pp.40-45.

## 〈学術論文等〉

秋田喜代美(共著), 「保育カンファレンスにおける談話スタイルとその規程要因」(中坪史典・増田時枝・箕輪潤子・安見克夫氏との共著), 『保育学研究』第50巻第1号, 2012, pp.29-40.

秋田喜代美(共著), 「地方自治体の接続期カリキュラムにおける接続期とカリキュラムの比較」(一前春子氏との共著), 『国際乳幼児教育研究』20, 2012, pp.85-95.

秋田喜代美(共著), 「人口規模の観点からみた地方自治体の保幼小連携体制作り」(一前春子氏との共著), 『国際乳幼児教育研究』20, 2012, pp.97-110.

秋田喜代美(共著), 「メタ文法能力の育成から見る中等教育段階での文法指導の展望と課題」(斉藤兆史・濱田秀行・榎木貴之・藤江康彦・藤森千尋・三瓶ゆき・王林鋒氏との共著), 『東京大学大学院教育学研究科紀要』52巻, 2013, pp.469-480.

秋田喜代美(共著), 「国語科と英語科におけるメタ文法授業のアクションリサーチ」(藤江康彦・斎藤兆史・藤森千尋・三瓶ゆき・王林峰・榎木貴之・濱田秀行・越智豊・田宮裕子氏との共著), 『東京大学大学院教育学研究科紀要』52巻, 2013, pp.337-366.

秋田喜代美(共著), 「保育所・幼稚園・小学校の連携等に関する現状分析及び今後の展望に関する研究Ⅲ」(網野武博・増田まゆみ・尾木まり・高辻千恵・一前春子氏との共著), 『東京家政大学生活科学研究所研究報告』35, 2012, pp.1-11.

秋田喜代美(単著), 「これからの教員養成と教師力の充実」, 『教育デザイン研究』, 2012, pp.1-8.

秋田喜代美(単著)「幼児の探究: 探究を可能にする条件」, 『日本教材文化研究財団紀要』42, 2012, pp.59-63.

秋田喜代美(単著)「わかる授業のための指導力と省察」, 『特別支援教育』45, 2012, pp.4-7.

秋田喜代美(単著)「幼児期の家庭学習」, 『児童心理』964, 2013, pp.82-87.

秋田喜代美(単著)「子どもの育ちを支える幼小の連携・接続: 自治体調査をもとに考える」, 『日本教育』No.420, 2013, pp.10-13.

秋田喜代美(単著)「教師の力を高める授業研究」, 『教育研究』1333, pp.14-17.

## 〈学会発表等〉

Akita, K. (招待講演) "Building Learning and Caring

- Communities through High Quality Lesson Studies”  
World Association of Lesson Studies, 2012. 11.28  
Singapore. NIE.
- Akita, K. (シンポジウム) “Trends of Lesson Study in Japan”, (A Global Lesson Study Research Symposium)  
World Association of Lesson Studies, 2012. 11.29  
Singapore. NIE.
- 秋田喜代美 (基調講演), 「学び続ける教師をいかに育み支援するか」, 『第14回日本教師学会大会』, 2013. 3 秋田大学
- 秋田喜代美 (共著), 「保育カンファレンスを捉える観点の分析—経験・職務による差異に注目して」(増田時枝・安見克夫・中坪史典・砂上史子・箕輪潤子氏と共著), 『日本保育学会第65回大会発表要旨集』, 2012, pp.333.
- 秋田喜代美 (共著), 「保育所と小学校の連携に関する教職員の意識 (2) 計画・記録・評価と要録の関係」(高辻千恵・増田まゆみ・網野武博・尾木まり・一前春子氏との共著), 『日本保育学会第65回大会発表要旨集』, 2012, pp.730.
- 秋田喜代美 (共著), 「持続可能な幼小連携の分析—接続カリキュラムから—」(一前春子・網野武博・尾木まり・高辻千恵氏との共著), 『日本保育学会第65回大会発表要旨集』, 2012, pp.731.
- 秋田喜代美 (共著), 「質の高い保育を考える (2) 保育所・幼稚園・小学校との接続と連携」(日本保育学会国際交流委員会・第回実行委員会, OMEP日本委員会共催企画シンポジウム指定討論者), 2012, pp.34-35.
- 秋田喜代美 (共著), 「子どもの視点から持続可能な保育システムのあり方を探る 3—乳幼児期の子どもの権利保障と保育制度の基本理念(「保育宣言」(仮)の検討)」, 『日本保育学会第65回大会発表要旨集』, 2012, pp.38-39.
- 秋田喜代美 (共著) 「子どもの頃の読書が成人の現在の読書に与える影響—国立青少年教育振興機構主催「子どもの読書活動と人材育成に関する調査研究・成人調査(5258人)」報告—」 「子どもの頃の読書が成人の意識・意欲・能力に与える影響」(藤森裕治・濱田秀行・八木雄一郎・肥田美代子との共著) 日本読書学会第56回大会発表要旨集2012.
- 秋田喜代美 (話題提供者), 「教育方法学の学問的固有性とは何か—教育方法学において「理論」とは何か—: 教育実践研究におけるグランドセオリーとローカルセオリー」, 『日本教育方法学会第48回大会・日本教育方法学会課題研究IV』, 2012, pp.22.
- 秋田喜代美 (共著) 「時期による幼稚園の片付けの違い—映像記録に対する語りの分析—」(砂上史子・中坪史典・増田時枝・箕輪潤子・安見克夫との共著) 『日本乳幼児教育学会第回大会要旨集』 2012
- 秋田喜代美 (共著) 「写真評価法 (PEMQ) から振り返る保育の質 (1) ~言葉にかかわる興味・関心を引き出す環境構成について~・(2) 科学にかかわる興味関心を引き出す環境構成について」(上田敏丈・門田理世・森暢子・無藤隆・小田豊・野口隆子・箕輪潤子 中坪史典・芦田宏・鈴木正敏との共著) 『日本乳幼児教育学会第回大会要旨集』 2012
- 秋田喜代美 (共著), 「全国地方自治体による幼小接続期カリキュラム開発の検討」(一前春子氏との共著), 『日本教育心理学会第54回総会論文集』 43, 2012.
- 秋田喜代美 (共著), 「中学生及び高校生の読書活動の実態とその規定要因 (1) 学校読書環境と読書行動; (2) 読書量・読書ジャンルと意識・意欲・能力との関連; (3) 過去の読書活動及び読書方略と読書量の関連」(深谷優子・上原友紀子・足立幸子氏らとの共著), 『日本発達心理学会第24回大会発表論文集』, 2013, pp.283-285.
- 秋田喜代美 (共著), 「幼児期から入学期の家庭教育調査 (1) (2)」(荒牧美佐子・田村徳子・高岡純子・都村聞人・秋田喜代美・無藤隆氏との共著), 『日本発達心理学会第24回大会発表論文集』, 2013, pp.401-402.
- 秋田喜代美 (共著), 「片付けの実態と目標についての認識と実際」(箕輪潤子・増田時枝・安見克夫・砂上史子・中坪史典氏との共著), 『日本発達心理学会第24回大会発表論文集』, 2013, pp.281.
- 秋田喜代美 (会員企画シンポジウム・指定討論者), 「分かち合いを通して身につける情動と認知その2—「歌いかけ」「読み聞かせ」「歌唱・読書指導」による発達支援」, 『日本発達心理学会第24回大会発表論文集』, 2013, pp.38-39.
- 秋田喜代美 (大会委員会企画シンポジウム・指定討論者), 「子どもの発達と教育との新たな接点を求めて」, 『日本発達心理学会第24回大会発表論文集』, 2013, pp.122-123.

### 〈調査研究等報告書〉

秋田喜代美（研究プロジェクト座長）『子どもの読書活動と人材育成に関する調査研究 概要版』独立行政法人国立青少年教育振興機構 2013

秋田喜代美、「これからの時代にもとめられる子どもの育ちへの期待」、『Benesse次世代育成研究所 第1回幼児期から小学1年生の家庭教育調査報告書』, 2013, pp.13-15.

### 〈教材作成監修〉

秋田喜代美（監修）、『図書館のすべてがわかる本1 図書館のはじまり・うつりかわり』、『図書館のすべてがわかる本2 図書館の役割を考えてみよう』、『図書館のすべてがわかる本3 日本と世界の図書館をしてみよう』、『図書館のすべてがわかる本4 図書館をもっと活用しよう』（こどもくらぶ・編）, 岩崎書店, 2012, 各巻総頁47.

秋田喜代美（総監修）、『発達が見える！3歳児の指導計画と保育資料』、『発達が見える！4歳児の指導計画と保育資料』、『発達が見える！5歳児の指導計画と保育資料』学研教育出版, 2013, 各総頁152.

### 浅井 幸子（准教授）

#### 〈雑誌論文〉

浅井幸子（学会発表）「和光幼稚園・和光鶴川幼稚園における『のりものごっこ』の成立と展開」『シンポジウム記録 保育実践史のなかのプロジェクトメソッド』『幼児教育史研究』第7号, 2012年11月, 54-60頁。

玉城久美子, 船山万里子, 浅井幸子, 望月一枝, 杉山二季, 黒田友紀「小学校の男性教師における低学年教育の経験—性分業とその教育実践上の問題」『質的心理学研究』12号, 2013年3月, 100-118頁。

#### 〈学会発表〉

船山万里子・杉山二季・玉城久美子・黒田友紀・望月一枝・浅井幸子「小学校における女性教師のキャリア形成—学年配置に着目して—」日本教師教育学会第22回大会, 2012年9月8日。

#### 〈その他〉

浅井幸子（文献紹介）「河野銀子・村松泰子編著, 村上郷子・高野良子・池上徹・木村育恵・田口久美子・杉山二季著『高校の「女性」校長が少ないのはなぜか—都道府県別分析と女性校長インタビューから探る』』『日本教師教育学会年報』第

21号, 2012年9月, 161頁。

浅井幸子（書評）「有働玲子著『話しことば教育の実践に関する研究』』『教育学研究』80巻1号, 2013年3月, 101-103頁。

浅井幸子（エッセイ）「和光幼稚園とレッジョ・エミリアの幼児教育の出会い—ペダゴジスタ, パオラ・カバツオーニ氏をお迎えして」『保育実習センター通信』3号, 和光大学現代人間学部心理教育学科保育実習センター, 2013年3月, 3-9頁。

### 藤江 康彦（准教授）

#### 〈著書〉

藤江康彦, 「第13章 教師への支援と教師との協働のあり方」, 無藤隆・長崎勤・日本発達心理学会（編）『発達科学ハンドブック第6巻』, 新曜社, 2012, Pp.130-140.

藤江康彦, 「Ⅲ-1 教室という空間」, 茂呂雄二・青山征彦・伊藤崇・有元典文・香川秀太（編）『活動と状況の心理学』, 新曜社, 2012, Pp.126-129.

#### 〈雑誌論文〉

秋田喜代美・藤江康彦・斎藤兆史・藤森千尋・三瓶ゆき・王林鋒・柁木貴之・濱田秀行・越智豊・田宮裕子, 「国語科と英語科におけるメタ文法授業のアクションリサーチ」, 『東京大学大学院教育学研究科紀要』, 52, 2013, 337-366  
教育内容開発コース

#### 教育内容開発コース

### 藤村 宣之（教授）

#### 〈著書〉

藤村宣之（単著）, 『数学的・科学的リテラシーの心理学—子どもの学力はどう高まるか—』, 有斐閣, 2012, 総頁数230.

田中耕治・鶴田清司・橋本美保・藤村宣之（共著）『新しい時代の教育方法』, 有斐閣, 2012, 総頁数311.

#### 〈雑誌論文〉

藤村宣之（単著）, 「数学的思考の発達と授業過程」, 『児童心理学の進歩』第51号（2012年版）, 日本児童研究所, 2012, pp.137-162.

藤村宣之（単著）, 「協同を通じた個の学びの深まり」, 『教育研究』平成24年5月号, 初等教育研究会, 2012, pp.14-17.

## 北村友人(准教授)

## 〈著書〉

北村友人(分担執筆),「国際協力リテラシーとグローバルな情報ガバナンス:東日本大震災の経験と防災教育のあり方」,孫崎享・音好宏・渡辺文夫編『総合的戦略論ハンドブック』ナカニシヤ出版,2012年7月,139-145頁。

北村友人(分担執筆),「世界の中の日本比較教育学—学問論と研究実態—」(森下稔・黒田一雄との共著),森下稔・山田肖子編『比較教育学の地平を拓く—多様な学問観と知の共働—』東信堂,2013年2月,20-46頁。

北村友人(分担執筆),「課題型教育研究と比較教育学—開発研究—」(黒田一雄との共著),森下稔・山田肖子編『比較教育学の地平を拓く—多様な学問観と知の共働—』東信堂,2013年2月,295-313頁。

北村友人(分担執筆),「アジアにおける高等教育の域内連携と質保証」,黒田一雄編『アジアの高等教育ガバナンス』勁草書房,2013年2月,200-228頁。

Yuto Kitamura(共著),*Privatization and Teacher Education in Cambodia: Implications for Equity*(co-authored with James H. Williams and Thomas Zimmermann). ESR Working Paper Series (Special Series: The Privatization in Education research Initiative) No.45, Open Society Foundations, 2012, 40p.

Yuto Kitamura(分担執筆),“Educational Activist Associations,” in Ness, D. and Chia-Ling, L. (eds.), *International Education: An Encyclopedia of Contemporary Issues and Systems*. Armonk, NY: M. E. Sharpe, 2013, pp.255-260.

## 〈雑誌論文〉

北村友人(単著),「平和構築のための国際教育協力に関する概念的考察—『権利としての教育』を考える—」『上智大学教育学論集』第47号,2013年3月,1-18頁。

北村友人(単著),「国際化とアジアの大学改革—地域連携と公共性をめぐって—」『NARASIA Q』Vol.2, 2013年2月,36-40頁。

Yuto Kitamura(単著),“The Mutually Complementary Relationship between EFA and ESD in Cambodia,” *International Journal of Environmental and Rural Development*, Vol.3, No.2, 2012, pp.7-13.

## 学校開発政策コース

## 大桃敏行(教授)

## 〈著書〉

北野秋男・吉良直・大桃敏行(共編著)『アメリカ教育改革の最前線—頂点への競争—』学術出版会,2012年。編集と「序章 アメリカの教育改革と本書の目的」(7-12,15-16),「第1章 インプット重視の平等保障策—1965年初等中等教育法制定から1988年改定まで—」(21-33頁)の執筆。

## 〈年報論文,その他〉

押田貴久・仲田康一・大桃敏行(共著)「自治体独自のカリキュラム開発—教育課程特例校に焦点を当てて—」東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化センター『年報(2012年度)』2013年,96-107頁。

大桃敏行(単著)「人文学・社会科学の社会貢献」第9回日・韓人文振興政策懇談会『人文学・社会科学に対する要請と社会的貢献の在り方』2012年,117-121頁。

大桃敏行(インタビュー記事)「教育委員会廃止論」,私はこう考える『総合教育技術』2012年12月号,小学館,60-61頁。

大桃敏行(単著)「はじめに—国立大学附属学校の存在意義と附属論集—」『東大附属論集』第56号,2013年,1-2頁。

## 〈学会等発表〉

押田貴久・仲田康一・大桃敏行「自治体独自のカリキュラム開発—教育課程特例校に焦点を当てて—」日本教育政策学会第19回大会,東京学芸大学,2012年7月7日。

大桃敏行・村上純一「地方発のカリキュラム開発—教育課程特例校を事例に—」東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化センター主催シンポジウム「社会に生きる学力形成をめざしたカリキュラム・イノベーション—具体的な実践の提案—」東京大学,2012年9月29日。

大桃敏行「米国における教育の平等保障とアカウンタビリティ」日本学術会議心理学・教育学委員会子ども・子育て環境の質保証のあり方検討分科会,日本学術会議,2012年11月20日。

Naoshi Kira and Toshiyuki Omomo, “A Comparative Study of System-level Policies to Ensure Educational Quality in the United States and Japan,” The 57th Annual Conference of the Comparative and International Education Society, New Orleans, U.S.A.,



March 11, 2013.

## 勝野正章(教授)

### 〈著書〉

Joint ILO/UNESCO Committee of Experts on the Application of the Recommendations concerning Teaching Personnel (2012) *Report Eleventh Session, Geneva, 8 - 12 October 2012*, Paris: UNESCO, Geneva/ILO, 25p.

### 〈雑誌論文〉

Katsuno, M. (2012). Teachers' professional identities in an era of testing accountability in Japan: The case of teachers in low-performing schools, *Education Research International*, 2012, Article ID 930279, 8 pages.

勝野正章(単著), 「教師というしごと—いま求められる教師の役割とは何か」, 『クレスコ(クレスコ編集委員会)』, 2012年4月号, 大月書店, pp.31-33.

勝野正章(単著), 「『検討委員会報告』を読んで」, 『学校運営』, 2012年6月号, 全国公立学校教頭会, pp.12-15.

勝野正章(単著), 「『全国公立学校教頭会の調査』からみえてくるもの」, 『学校運営』, 2012年8月号, 全国公立学校教頭会, pp.6-11.

勝野正章(単著), 「教育改革における教師『個人』と協働」, 『教育』, No.800, 2012年9月号, かもがわ出版, pp.75-85.

### 〈その他業績〉

勝野正章(報告書), 「教員の資質向上に関する政策に求められる視点」, 日本教育学会特別課題研究委員会『現職教師教育カリキュラムの教育学的検討 研究報告書』, 2012年9月, pp.1-7.

勝野正章(学会発表), 「教員評価を展望する」, 教育目標・評価学会第23回大会, 東洋大学, 2012年11月11日.

勝野正章(学会発表), 「教師教育改革の現在」, 日本教育学会北海道地区研究会, 北海道大学, 2012年11月24日.

## 村上祐介(准教授)

### 〈著書〉

金井利之編著, 『組織・人材育成(シリーズ自治体政策法務講座 第4巻)』, ぎょうせい, 2013, 275-300頁(第8章「専門職と法務」)を担当

公益財団法人日本都市センター編, 『発達障害支援ネットワークの確立に向けて』, 公益財団法人日本都市センター, 2013, 37-49頁を担当

若井彌一他編, 『必携教職六法(2014年度版)』, 協同出版, 2013, 936-967頁を担当

中田康彦, 佐藤広美, 佐貫浩編, 『大阪—「教育改革」が問う教育と民主主義』, かもがわ出版, 2012, 105-117頁を担当(『教育』2012年7月号を一部修正したもの)

日本教育行政学会研究推進委員会編, 『地方政治と教育行財政改革—転換期の変容をどう見るか』, 福村出版, 2012, 11-28頁(荻原克男と共著), 192-212頁, 229-234頁

### 〈雑誌論文〉

Murakami, Yusuke (Translated by Ohmori, Ai), Rethinking a Case Study Method in Educational Research: A Comparative Analysis Method in Qualitative Research, *Educational Studies in Japan* (7), pp.81-96, 2013(※「教育学における事例研究の方法論再考—定性的研究における比較の方法—」(『教育学研究』78巻4号)の英訳)

村上祐介(単著), 「授業時間数の多寡は小学校教員の勤務実態にいかなる影響を与えるのか」, 『教員の勤務負担軽減等に資するための学校のタイム・マネジメントの開発研究(平成23年度財団法人文教協会調査・研究助成金報告書)』, 2012, 19-33頁

村上祐介(単著), 「教育目標は誰が決めるのか—教育と政治の関係をめぐる課題」, 『教育』第798号, 2012, 35-43頁

村上祐介(単著), 「地方政治の変容と自治体教育行政制度の課題」, 『教育と文化』, 第67号, 2012, 21-33頁

### 〈その他〉

村上祐介(単著), 「『教育行政の政治学』の課題と視角—『教育行政の政治学: 教育委員会制度の改革と実態に関する実証的研究』の書評への応答を通じて—」『教育行政学論叢』, 第32号, 2012, 181-187頁

村上祐介(単著), 「維新八策の教育改革案をどうみるか」, 『生活経済政策』第190号, 2012年10月, 18-22頁

### 〈学会発表〉

Yusuke MURAKAMI, Policymaking Process and Policy Stability after a Change of Government in Japan, British Association for Japanese Studies Conference,

Norwich 2012年 9月 7日

Yusuke MURAKAMI, The Dilemma between Popular Control and Professionalism in Local Governance, 2012 Asian Group for Public Administration Annual Conference, Maldives 2012年 5月 9日

## 学校教育高度化センター

### 植 阪 友 理 (助教)

#### <著書>

植阪友理 (2013) 「教育心理学—学びにおけるつまずきと向かい合う」 藤田哲也 (編) 『絶対役立つ教養の心理学 展開編—人生をさらに有意義に過ごすために—』 ミネルヴァ書房 pp.11-36.

#### <学術雑誌論文>

Manalo, E., Uesaka, Y., Pérez-Kriz, S., Kato, M., & Fukaya, T. (2013). Science and engineering students' use of diagrams during note taking versus explanation. *Educational Studies*, 39, 118-123. (査読有)

Uesaka, Y., Manalo, E., & Nakagawa, M. (2012). Are teachers aware of students' lack of spontaneity in diagram use? Suggestions for a mathematical model-based analysis of teachers' predictions. *Lecture Notes in Artificial Intelligence*, 7352, 312-314. (査読有)

Manalo, E., & Uesaka, Y. (2012). Elucidating the mechanism of spontaneous diagram use in explanations: How cognitive processing of text and diagrammatic representations is influenced by individual and task-related factors. *Lecture Notes in Artificial Intelligence*, 7352, 35-50. (査読有)

Uesaka, Y., (2012) Reviews of psychological studies and educational practices focusing on improving student learning skills: Suggestions for addressing the gap between academic studies and classroom practices, *The Annual Report of Educational Psychology in Japan*, Vol. 51, pp.105-117.

#### <学会発表>

Manalo, E., & Uesaka, Y. (2012). *Elucidating the mechanism of spontaneous diagram use in explanations: How cognitive processing of text and diagrammatic representations is influenced by individual and task-related factors*. Paper presented at the Diagrams 2012 Conference, July 2-6, University of Kent, Canterbury, United Kingdom. (査読有)

Uesaka, Y., Manalo, E., & Nakagawa, M. (2012). *Are teachers aware of students' lack of spontaneity in*

*diagram use? Suggestions for a mathematical model-based analysis of teachers' predictions*. Poster presented at the Diagrams 2012 Conference, July 2-6, University of Kent, Canterbury, UK. (査読有)

植阪友理・鈴木雅之・市川伸一 (2012年 9月) 因子分析と項目反応理論を用いた学習方略利用傾向の分析 日本心理学会第76回総会. ポスター発表

瀬尾美紀子・植阪友理・市川伸一 (2012年11月) 教訓帰納方略の自発的利用を促す学習法講座の試行的開発 第54回日本教育心理学会 ポスター発表

Emmanuel Manalo & 植阪友理 (2012年11月) 説明を書く場面における図表：なぜ学習者は十分に利用しないのか？ 自主シンポジウム「高等教育における学生のコミュニケーション能力をめぐる重要課題」における話題提供 第54回日本教育心理学会総会

和嶋雄一郎・植阪友理・Emmanuel Manalo (2012年 12月) 自由記述を利用した図に対する認知イメージの推定とその傾向 日本認知科学会第29回大会 ポスター発表 (査読有)

#### <講演>

植阪友理 (2012) 「自立した学習者を育てるために」ベネッセ高等教育研究所, 多摩, 東京, 9月19日 (招待講演)

植阪友理 (2012) 「認知カウンセリングへの招待」教師の第三の学び研究会：T-Learning 拡大学習会, お茶の水大学, 東京, 7月27日 (招待講演)

Manalo, E., & Uesaka, Y. (2012). Getting students to spontaneously use effective learning strategies. Invited lecture given at Hong Kong Institute of Education, Hong Kong, May 3. (招待講演)

植阪友理 (2012) 「一人ひとりの子どもたちの学びを育む学習支援について」神奈川県総合教育センター, 神奈川, 2月6日, (招待講演)

#### <その他の著作物>

植阪友理・床勝信 (2012) 「自立した学習者を育てるために学習観を変える」View21 (中学校版) pp.6-11.

植阪友理・鈴木雅之・市川伸一 (2012) 高校時代における教科ごとの学習方略利用の実態—IRTによる解析からの示唆— 植阪友理・エマニュエル マナロ (編) 『学び方の上手な学習者を育てるために—学習方略プロジェクトH23年度研究成果』, pp4-10.

Emmanuel Manalo・植阪友理・和嶋雄一郎 (2012)

Students' use of diagrams as a learning strategy: some of the mental process that influence such use. 植阪友理・エマニュエル マナロ (編) 『学び方の上手な学習者を育てるために—学習方略プロジェクトH23年度研究成果』, pp10-15.

植阪友理・瀬尾美紀子・市川伸一 (2012) 日本の小中学校における学習法指導のあり方とその課題 植阪友理・エマニュエル マナロ (編) 『学び方の上手な学習者を育てるために—学習方略プロジェクトH23年度研究成果』, pp22-26

瀬尾美紀子・植阪友理・市川伸一 (2012) 教訓帰納講座の開発 植阪友理・エマニュエル マナロ (編) 『学び方の上手な学習者を育てるために—学習方略プロジェクトH23年度研究成果』, pp29-33.

植阪友理・エマニュエル マナロ (編) (2012) 『学び方の上手な学習者を育てるために—学習方略プロジェクトH23年度研究成果』 Working papers vol. 1, 東京大学.

## 海洋教育促進研究室

日置光久 (特任教授)

### 〈著書〉

・日置光久 (編著), 『小学校理科の授業 新設備基準と単元別実践例』(村山哲哉氏と共編), 小学館, 2012, 総頁数144.

・日置光久 (編著), 『子どもと自然とネイチャーゲーム』(村山哲哉, 神長美津子, 津金美智子氏と共編), 日本ネイチャーゲーム協会, 2012, 総頁数118.

### 〈雑誌論文〉

・日置光久 (単著), 「理科教育の未来」, 全国地質調査業協会連合会編集 『地質と調査』 第133号, 2012, pp.2-7.

## コンピュータ相談室

紙名哲生 (特任助教)

### 〈査読付論文〉

Tetsuo Kamina, Tomoyuki Aotani and Hidehiko Masuhara (学会発表), Bridging Real-World Contexts and Units of Behavioral Variations by Composite Layers, In Proc. 4th International Workshop on Context-Oriented Programming (COP'13), ACM, 2012, pp.4:1-4:6.

Tetsuo Kamina, Tomoyuki Aotani and Hidehiko Masuhara (論文誌), Introducing Composite Layers in EventCJ, IPSJ Transactions on Programming, 6(1), 2013, pp.1-8.

Tetsuo Kamina, Tomoyuki Aotani and Hidehiko Masuhara (学会発表), A Core Calculus of Composite Layers, In Proc. 2013 International Workshop on Foundations of Aspect-Oriented Languages (FOAL'13), 2013, pp.7-12.

### 〈査読無し論文〉

青谷知幸, 紙名哲生, 増原英彦, 「文脈指向プログラムの資源利用解析に基づく層活性解析法」, 情報処理学会第89回プログラミング研究発表会:2012-1-(4), 2012年6月.

### 〈口頭発表〉

紙名哲生, 青谷知幸, 増原英彦, 「JavaCat: Realizing Context as Fluent」, 第15回プログラミングおよびプログラミング言語ワークショップ (PPL2013), 2013年3月.